

---

# 月見草の咲く街

篠森京夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月見草の咲く街

### 【Nコード】

N6030D

### 【作者名】

篠森京夜

### 【あらすじ】

自称一流探偵、ローザ。富豪の少女、ユーノ。二人は個々の思惑を胸に、街を騒がす吸血鬼を追ってゆく。やがて明らかになる真実を前に、二人の関係は。

## プロローグ

その街の名はウインストリア。

古くから《風と水の都》の異名を持つ、少し大きな港街。

遠い過去から現在まで続く東方との貿易港であり、周囲を取り巻く複雑な地形から大戦時には最重要軍事拠点であったウインストリアも、自動車や鉄道の普及に伴い交通網の発達した現在では密かな人気を誇る旅行スポットとなっている。

街の南方に連なり、一年を通じて雪化粧を忘れないクスウル山脈。数多の砂礫に磨き抜かれて山麓より湧き出る清廉な流れと、それによって分断された区域を繋ぐ大小様々な橋の数々。内陸と海外の文化が混じり合い、建物や服装が独特の美しさを誇る一方で、今尚街の周辺には城跡や高い壁が残り、過去に流された血の多さを物語っている。

そしてまた。

百の年月が流れても、千の嵐が過ぎ去っても、万の人々が訪れても、億の草木が芽吹いたとしても……その地に根づいた風習というもの、決して容易に色褪せるものではなく。

「どうしていけないっていうのよ？」

カウンターに両肘をついて、一人の女性が窓口を覗き込んだ。

「あたしは仕事がしたいって言ってるだけよ。別に泥棒しようってわけじゃないのよ」

「何度も繰り返して申し上げておりますが」

彼女と向かい合って座っている受付係が、クイツと眼鏡を押し上げる。

「この街で新しく商売を始められる場合、国の許可証、もしくは、この街に古くから住む方の紹介状が必要なのです」

街の北西に位置する行政区域の一角、銀行を兼ねた役所の館内。

高い位置にある窓から暖かな陽光が射し込み、ぽかぽかぬくぬくと心地好い、今は昼下がり。そんな中、役所を訪れた女性も、応対している受付係も、少しばかり不機嫌な様子を見せていた。

女性のほうはスラリと背が高く銀色の髪は腰にまで及び、翠の瞳が印象的な整った容姿に知的な雰囲気を漂わせている。年の頃は二十歳前くらいだろうか。びしっとしたスーツに身を固めてはいるが、大人の魅力を演出するには少々気が早い感が拭えない。

一方受付係の男性は、小柄な体型に短く切り揃えた髪、こちらも整った容姿をしているが、縦幅の狭い眼鏡と気難しそうな表情が見る者に冷たい印象を与えている。年は二十代半ばといったところだろう。

「更にもう一つ付け加えさせていただくなら、貴女が何らかの重大な過失を犯した際にその責任を取って頂ける保証人の指定と、保証人本人の了承が必要です」

「……二つじゃない」

ぼそりと呟いた言葉に受付係がムツとする。女性は慌てて悲しそうな表情を作った。

「あたしはつい最近引っ越してきたばかりなの。国の許可証なんて持っていないし、紹介状を書いてくれそうな人も、保証人になつてくれそうな人もいないわ……ねえ、何とかならないの？ あたしイヤよ、これ以上タライ回しにされるのは。どうせ国に許可を申請するのにも、面倒な手続きがあるんでしょ？」

「勿論です。何にしても、必要な書類を提出していただかない以上、どうにもなりません」

今度は彼女の方がムツとなる番だった。胸の前で組まれた両手に、静かに力がこもる。

「アンタねえ……あたしを誰だと思ってるの？」

「……誰です？」

自分で言っておいて、女性がギクリと顔をこわばらせる。苦虫でも噛み潰したような表情に、やがて挑むような笑みが浮かぶ。声音

を抑えて、彼女は、言った。

「あたしは……あたしは、旅の超一流の探偵、ローザよ。覚えておきなさい」

「……忘れます」

受付係はピシヤリと受付の窓を閉めた。

気まずい沈黙が漂い、他の住民や職員たちが互いに顔を見合わせる。

「ナイスな反応してくれるじゃない……やっぱダメか」

ローザと名乗った女性は、軽く溜め息をついた。頭をポリポリと掻きながら、受付のカウンターの向かい側に並んでいるソファの一つに、多少乱暴に座り込む。

ゆっくりと、いつの間にか降り出した雨音のように、役所にいつもの静かなざわめきが戻ってきて初めて、ローザは辺りがずっと静まり返っていたことに気がついた。

「……何か？」

思いつきり不機嫌な声を出してやると、こちらを見て何事かささやいていた婦人たちがサツと目を逸らした。そのまま素知らぬ顔でカウンターに向かい、受付係と話し始める。職員たちも事務に没頭し始め、ローザがつまらなそうに鼻を鳴らしたとき。

役所の出入口の扉が開き、一人の少女が入ってきた。

夏の名残あるこの季節に、少女は長袖のドレスを着ていた。頭に被った麦藁帽子からはふんわりとした栗色の髪があふれ、軽く肩にかかっている。手には繊細なレースの日傘と大きな鞆を持ち、明るい純白の服装とは対照的なブラウンのサングラスが、妙に似合っていて可愛らしい。仕草や服装を見れば十代半ばを過ぎた頃だとわかるが、サングラスの奥に見える大きな瞳と、抱けば折れそうなほどに華奢な身体が、少女の印象をずっと幼く見せている。少女は後ろ手に扉を閉めると、まっすぐにカウンターに向かった。

「あの、すみません。先日お手紙を頂いた者ですが……」

少女の声に受付の窓が開く。ローザは何の気なしに少女の方を見

ていたが、出てきた受付係が先程の彼だったので見るとやめた。

清々しい風が窓から吹き込み、髪や服を揺らして去る。山麓の景色は鮮やかな色彩を帯び始め、この街に秋が訪れようとしていることを知らせている。そんな様子を眺めて午後のひとときを過ごしながら、ローザの意識は窓の外とは別の方向に向けられていた。

「これほどの財産を遊ばせておくのは勿体ないですよ。これを元手に商売でも始められてはいかがですか？」

ついさっきまでローザに向かって、やれ許可証だ、やれ保証人だとうるさく言っていた受付係が、うつて変わった態度で少女と話している。どうやら少女はかなりの財産家で、その管理について相談に来ているようだ。

「ちょうど今、商業区域の一等地に空きがでているんですよ。多少値は張りますが、貴女の財力を考えれば何の問題ありません。どうですか、考えてみては」

「いえ、私は……そういうことは苦手ですので……」

世の中色々よね、とローザは思った。やる気があり、実力もある（と彼女は自負している）自分が手続きの段階でつまづいているというのに、一方では一人で商売が始められるだけの資産と条件を持ちながら、静かな暮らしを望む少女がいる。

だが少女を妬むような気持ちは、ローザには微塵もなかった。人にはそれぞれ持って生まれたものがある。それが武力であれ、知力であれ、財力であれ……それはその人だからこそ持ち得たのであり、他人が望んで得られるものではないし、また必ずしも本人の幸せにつながるものではないということを、彼女はよく知っていたからだ。話はどうやら財産を預けたままにしておく形で終わったらしい。

少女が受付係に丁寧に御辞儀をして別れの挨拶を交わしている。

と、振り返った少女とローザの目が合った。同じように御辞儀をされ、慌ててペコリと御辞儀を返す。少女はにっこりと微笑むと、ゆったりとした足取りでその場を去った。

「不思議な子……」

ローザは呟いた。開け放たれた窓の向こう、役所の玄関を出たところで、たいして晴れてもいないのに、少女が日傘を広げているのが見える。

……と。役所の正面の通りを少し先に行った所に、人相の悪い男たちがたむろしているのが見えた。それとなく少女を観察しながら、何事が相談している。やがて少女が大通りを逸れて脇道に入ると、男たちは数組に別れ、各々別々の脇道に散っていった。

ローザは立ち上がり、

「しかもモテモテか……ほんと、世の中色々よね」  
颯爽とした足取りで役所を出た。

少女は、困った顔をして立ち止まった。

道行く先に、人相の悪い男達が立っている。ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべて、狭い路地を塞ぐように。これでは通ることができない。元来た道を戻ろうと振り返ると、後ろにも別の男達がいる。少女はゆっくりと周囲を見回した。行政区域であるこの辺りには、住宅の類は建てられていない。左右の壁には窓一つなく、前後共に大柄な体格の男達に塞がれているので、大通りからも彼女の姿は見えないはずだ。

「あのう……？」

可愛らしく小首を傾げて、少女は尋ねた。

「そこを通して頂けませんか？」

「丘の上の屋敷の娘だな」

リーダー格の男が確認するように言う。

「その鞆を渡してもらおうか」

「はあ……」

場違いにのんびりとした口調で、少女は答えた。

「あの、これは私の大切なものです……他の方にお譲りするのは、ちょっと……」

「まあまあ、そう言うなよ……おとなしく渡しゃあ、いいんだからよっ！」

「あつ……」

男がいきなり鞆をつかみ、少女の手から乱暴に引ったくる。男はその場で中身を確認し、目を丸くして叫んだ。

「何だ、これは！？」

何事かと駆け寄った他の男達が、同じように目を丸くする。そこには二枚一組の小さな色硝子がズラリと並んでいた。ワインレッド、プリズムパープル、スカイブルー、ダークグレーなど……丸形



やら菱形やら、果ては逆三角形やら、色も形も様々なサングラスの数々が、所狭しと敷き詰められている。

「それは私のコレクションなんです」

少女の声には、少し自慢げな響きがあった。

「右上から、二十年前のスタンダードモデル、次に五年前のデザインースブランドのもので……」

「ふざけんじゃねえ！」

男は鞆を地面に叩きつけた。反動で蓋が閉まり、少女の足元まで転がってくる。クルクルと回転している鞆を片足で踏みつけ、男は少女の顔にナイフを突きつけた。

「金はどこだ！」

「はあ、それでしたら、帰りにソフトクリームを食べようかと……」

男の剣幕に目をばちくりさせ、少女が素直に財布を取り出す。またもひったくるように財布をつかみ取り、逆さにして振る男の目の前を、数枚の銅貨が通り過ぎた。チャリチャリーン……と安っぽい音が響く中、男の身体が小刻みに震え始める。

「こっ、こんのガキ……ええい、くそっ！　こうなったらこいつを誘拐して……！」

「人質にして、身代金をガツポリ頂いて……ついでにイタズラでも？」

「あ、それもいいな……って誰だデメエ！？」

いつの間にか少女の前に現れた気の強そうな女に、男達は慌てて身構えた。

「どっから出て来やがった！？」

「どっから……ってねえ、アンタたち鞆の中身を確認するときに集まったまんまでしょうが。そんな状況じゃ、どっからだって出てこられるわよ……それにしても、よくあるタイプの話によくいるタイプの連中ね。よく失敗するタイプの組み合わせだわ」

バサツと後髪を掻き上げ、その女性……ローザは、ニツ、と不敵な笑みを浮かべた。

「このアマア！」

「遅いつ！」

つかみかかろうとする男達の目の前で、ローザの手に銀色の銃が出現する。まるで、最初からそこにあつたかのように。一瞬怯んだ男達の腕や脚に次々と弾丸を撃ち込み、

「これもよくあるセリフ……死にたくないならとつとと失せな！」

ローザは銃口を男達の顔の高さに向けた。

「ひっ……うわああああっ！」

撃たれた腕を押さえて、あるいは脚を引きずりながら、男達が我先にと逃げていく。やがて彼等の後ろ姿が見えなくなると、ローザはおもむろに銃口を自分のこめかみに押し当て、

「……バア~~~~~カ」

引き金を引いた。

その瞬間、露地裏に響いたのは、カチン……という撃鉄の降りる音だった。

弾切れ、である。

「あの、ありがとうございます」

声をかけられ、ローザは振り返った。拾った鞆を手に持って、少女が立っている。どうやら怪我はなさそうだ。

「お強いんですね……いつも襟首に銃を？」

「え？……ああ、まあいつもってワケじゃないけどね」

ローザは少し驚いた。あの瞬間、髪を掻き上げる動作に見せかけで襟首から取り出した銃は、長い銀髪がカモフラージュになってほとんど見えなかったはずだ。いくら背中を見せていたとはいえ、得意の早抜きがたった一目で見抜かれるなんて。しかも現実の銃撃を目の前にして、少しも動じた様子がない。

ぼんやりしてるように見えるけど、この子、只者じゃないわね。

ローザは思ったが、口には出さなかった。

「とりあえず、話は後よ。まずはここを出ましょ」

「そうですか、探偵さんなんですか……」

広げた日傘を脇に抱え、鞆の中のサングラスを一つ一つ点検しながら、少女は器用にソフトクリームに口をつけた。

「とは言っても、まだ何の事件も解決してないんだけどね……って言うか、まだ開業もしてないか」

「この街で商売を始めるのは難しいですからね。さっきのソフトクリーム屋さんも、出店場所が特定できない移動屋台ということで随分苦勞なされたそうですから」

「へえ、そうなの？」

「はい、以前お聞きしたことがあるんです。最初の手続きから許可が下りるまで、合計一年以上もかかったって仰ってました」

「げっ、一年……そりゃキツイわ……」

ローザはソフトクリームのコーンを口の中に押し込んだ。

二人は公園前通りのベンチに並んで腰かけてソフトクリームを食べていた。勿論、少女のおごりで、だ。秋も近い曇り空の下でソフトクリームは少々場違いな気もするが、闘争の後の火照った頬には冷たくて心地好い。コーンの先端までバリバリと食べてしまうと、ローザはベンチの背もたれに両腕を引っかけ、腰を前にずらして空を見上げた。

「あゝあ。やっと自由になれたと思ったのになあ。今更家に戻りたくもないし……」

少しずつコーンを囓っていた少女が、驚いて振り向く。

「家出でもなさったんですか？」

「まあね。あ、言っとくけど、別に追い出されたわけじゃないのよ」少女の瞳に浮かんだ憐憫の色に、ローザは慌てて言い足した。会って間もない少女に話して聞かせるようなことでもない気がするが、彼女の素直で純粋な瞳を見ると、何故だか不思議と話したくなる。

「こう見えてもね、あたし結構いいとこの娘でさ。何て言うのかな、

古臭いというか、保守的な家だったのよ。小さい頃から何でも手に入ってたけど、本当の意味で手に入れられたものはほとんどなかったで、イヤになって飛び出したの。商売のほうも、本当は親父のコネ出せば楽なんだけどね」

ローザは懷から銃を取り出すと、空に向けて撃つ仕草をした。

「今はコイツが唯一の相棒ってワケよ」

少女は銃口のさす空を見上げた。

「羨ましいですね、そういうのって。私にはそんなこと、とてもできません……」

サングラスの奥の瞳が、眩しさに耐えるように細められる。ローザは手を下ろすと、弾倉に新しい弾丸を詰め始めた。

「コイツはね、あたしの家に伝わる『吸血鬼退治の銃』なの。昔、ご先祖様がコイツで吸血鬼を退治したんだって……人にあらざる者閻にすまう者よ。我が名はデュルゼル・レクター、そなたに永久の眠りを与えんとする者である」

ローザは芝居がかった口調で言った。

「互いの尊厳と誇りにかけて、全身全霊をもって戦おうではないか……ってね。ま、信じちゃいけないけどさ……でもコイツ、結構いい銃でしょ？」

弾倉を手のひらで回転させ、軽く振ってガチャリと元の位置に戻す。ローザの言葉通り古びてはいるがしっかりとした造りで、銃身に彫られた模様も美しい銀製のリボルバーだ。少女は少しの間、銃をまじまじと見つめていたが、やがて確信に満ちた声で言った。

「これは……どうやら、とても強い『力』のある銃のようですね」

確かな意志をもって扱えば、きっと貴女の想いに応えてくれます」

「へえ……不思議ね、あたしんちのバーちゃんも同じこと言ってた」

「ええ、間違いないと思います。本当に吸血鬼を倒したのかどうかはわかりませんが……あ、そうだ、吸血鬼と言えば……」

「何？」

「近頃、この街に吸血鬼の噂が流れているのをご存じですか？」

少女の何気ない言葉に、ローザは事件の匂いを嗅ぎ取った。

「ううん、初めて聞くわ……詳しく教えてくれる？」

「はい……数週間前から、十数人も若い女性が夜闇に紛れて襲われているんです」

ピンク色のサングラスを点検しながら、少女は事件のあらましを説明した。

「そのほとんどが未遂に終わってはいますが、既に三人の方が命を落としています。助かった方達も逃げるだけで精一杯だったらしく、犯人は依然不明。喉を喰い破るという殺害の仕方から、野獣の類の仕業ではないかとも言われていますが……この辺りには、古くから吸血鬼の伝承があるので……」

色硝子を太陽の光で透かし見て、少女が眩しそうに目を細める。

「警察も捜査に行き詰まっているらしくて、真犯人を捕らえた者には賞金を出すとか」

「賞金？」

「はい、ラウアール金貨で百枚だそうです」

「ひゃ、ひゃくう！？」

ローザは思わず大声を上げてしまった。大見栄きつて家を飛び出してからというもの、一月につきラウアール銀貨三枚のおんぼろアパートで慣れない貧困生活を送っていたのだ。すっかり金勘定が板についてしまった頭をフル回転させ、素早く回答をはじき出す。以前見つけたテナントを借りて、生活と開業に必要な道具を揃えても、十二分におつりがくる額だ。貯金も底をつきかけている今、この機を逃す手はない。

「……よし」

ローザは決心した。

「やってやろうじゃないの。初仕事には大き過ぎるくらいでちょうどいいわ」

「えっ？」

このような展開は予想していなかったのか、少女が驚いた様子で

振り向く。

「……あの、変なことを聞くようですが……恐くはないのですか？」

「まさか。この街のことを調べたときに、図書館の蔵書で読んだことがあるのよ。もうずっと昔に、東方から上陸した伝染病で大勢の人が亡くなったって。そのことを、昔の人は『吸血鬼』って呼んだらしいわ。そんな昔話より、本当に恐いのは人間のほうよ」

「そう、ですか……そうかも知れませんか」

少し安心したように微笑んで、少女は鞆の蓋を閉め、立ち上がった。いつの間にか目の前に止まっていた古い馬車の扉を開け、座席の奥に鞆を乗せて振り返る。

「それでは、私はこれで失礼させていただきます。今日は本当にありがとうございました。このお礼は、いつか必ず」

「いいわよ、ソフトクリームおごってもらったし」

少女は心から嬉しそうに微笑むと、深々と御辞儀をして座席に乗り、扉を閉めた。

「私、『風渡る丘』に住んでおります。もしよろしければ、お暇なときにでも是非お越し下さい。ああ、申し遅れましたが私、橘『優乃』ジエクスクトと申します」

「ユーノ……ね。私はローゼンシル『レクター』よ。ローザでいいわ」  
遅しい後ろ姿の御者が馬にムチを入れ、馬車がガラガラと音をたてて動き出す。

「ではローザさん、また」

少女が小窓の向こう側で小さく手を振る。やがて馬車が行ってしまつと、ローザは両脚を振り上げ、跳ねるように立ち上がった。

「さて、やるだけやってみるか！　せーっかく憧れの街に来たんだもんね！」

うっ~~~~ん、と大きく伸びをして、晴れ始めた空に向けた目を細める。

規則正しく配列された石畳の街路が、青々と繁る常緑の街路樹が、

小舟の行き交う穏やかな流れが、陽の光に照らされて明るく彩られている。雲の切れ目から覗く青空は何処までも高く、南の山脈から吹き降りてくる風に港特有の湿っぽさはない。

「《風と水の都》か……綺麗な街ね」

ローザは涼しい空気を胸いっぱい吸い込んだ。

「珍しいですね」

御者台で馬を操りながら、男は後部座席の主人に声をかけた。

「お嬢様が屋敷に人を招待されるとは」

「面白い人なんですよ。行動的で、自信にあふれていて……」

「ほお、この街の女性にしては珍しい」

「つい最近、他の街から引っ越してきたそうです。……家を、捨てて」

楽しそうに喋っていた少女の瞳に、ふと寂しげな色が宿る。

「でも、私は逃げ出せない……」

男は振り返らなかつた。主人がどのような表情をしているのかは見なくともわかる。

風に髪を乱されながら街を眺める少女の顔には、深い孤独の表情が浮かべられている。

暗闇の底に、人々はいた。

息を殺し、目を閉じて、まるで闇に溶け込もうとしているかのよう  
うに。

シャリイイイ……ン……。

光のない世界に、澄んだ金属音が響く。人々の気配が、静寂から  
沈黙へと変わる。

やがて余韻が失われ、辺りに静けさが戻ったかに思えた頃。初め  
微かに、やがて大きく力強く響き始める靴音と共に、闇の中に血の  
ように赤い炎が次々と灯った。

二列に並ぶ炎の道を歩んでいるのは、豪華絢爛な衣装に身を包ん  
だ初老の男だ。手にしている錫杖も美しい意匠の施されたもので、  
暗闇に沈むおぼろげな光の中で金銀に輝いている。炎の灯る燭台を  
持つて立ち並ぶ男達の服装は、初老の男のものに比べれば少々見劣  
りするものの、それでも充分にきらびやかだ。対照的に、周囲にう  
ずくまる人々の服装は、どれも簡素なものばかり。

初老の男の行く手には壇があった。備えつけられた階を一つ一つ  
昇り、壇の上へと達すると、男は人々のほうに向き直り、錫杖を振  
りかざし、振り降ろした。

シャリイイイ……ン……。

錫杖の先端の輪が擦れ合い、澄んだ音色を響かせる。途端、壇上  
の中央に立つ男の姿が明るく照らし出された。壇の奥の壁、かなり  
高い位置にあるステンドグラスを被っていたカーテンが開かれたの  
だ。

辺りの様子もかろうじて見ることができるようになった。壇上の  
男の背後には、とてつもなく巨大なパイプオルガンが備えてある。  
周囲はぐるりと壁に囲まれており、天井は半球体。先端を丸くした  
円柱のような空間だ。



「皆、よくぞ集まってくれた」

初老の男は朗々と響く声で言った。

「本日こうして集まってもらったのは他でもない。皆も知っていることは思うが……近頃、この街に吸血鬼の噂が広まっている」

誰もが心の中で、やはり、と呟いた。人々の表情が緊張に引き締まる。

「実際に目撃した者は未だいないそうだが、吸血鬼と思われる者の手によって、既に三人もの尊い命が失われている。我々は吸血鬼倒伐のため、日夜厳重な警戒体制を敷いているが……皆には、ここで今一度考えて欲しい。人は神に何を求めるのか。生活の保証、将来の保証、繁栄の保証……そして死後の保証。そう、人は心の平安を求めるのだ」

誰一人として反論する者がいないことを確認して、男は続けた。

「人とは弱く儚い存在だ。人は本来、大いなる神の加護の下でのみ心の安らぎを、平穏な暮らしを得ることができるのだ。それが今の者たちときたらどうだ」

男は芝居がかった動作で両腕を広げた。

「神の御子たる誇りを失い、神を敬う心すらも忘れている。自分から生きるための努力をせず、神に祈ることもせず……それでいて彼等は、自分だけは生き残れる、自分に被害が及ぶ前に誰かが解決してくれるなどと思いつているのだ！

……私は、今回の事件は、墮落した人に対する神の罰ではないかと考えている。一刻も早く神の教えを広め、神の怒りを鎮めなければならぬ。この街が信仰で満たされれば、吸血鬼は自ずと去るであらう……皆には、その手助けをしてもらいたいのだ」

人々の反応は様々だった。やる気に満ちた顔を上げる者、不安の呟きをもらす者、じつとりと汗ばんだ拳を握り締める者。男は静かに片手を挙げ、ざわめきを鎮めた。

「恐れることはない。皆は既に、神を敬う心を取り戻しているのだから。神は、神を愛する者に罰を下されることは決してない」

男は勢いよく錫杖を前に突き出した。光の加減か、その先端が薄ぼんやりと赤く染まる。

「神を敬わぬ者に罰を！　そして神を愛する者に祝福を！」

「神を敬わぬ者に罰を！　神を愛する者に祝福を！」

燭台を持った男たちが繰り返し、幾重にも反響する声と共に人々が立ち上がる。我先に出口に向かう敬虔な信者たちの姿に、男は満足気な笑みを浮かべた。

夜。

雲一つなく綺麗に晴れた星空に、月が煌々と輝き始める頃。

既に大半の人々が仕事を終えて帰路につき、シ……ンと静まり返った商業区域の裏通りを、ローザは一人、事件解明の鍵を求めて歩いていた。

優乃と名乗った少女と別れた後、街の人から聞いた話や警察が公開している情報を繋ぎ合わせてみたところ、どうやら吸血鬼は同じ場所には二度と現れていないらしい。そこで残された地域の地理的条件を徹底的に調べ上げて人目につかずに犯罪を起こせそうな場所を特定し、更にその中から最も吸血鬼が出没する可能性が高いと思われる場所を突き止めたのだ。その手際の良さは、彼女が確かに探偵として優秀な技能を持っていることを証明するものだった。一部、非科学的な要素に頼ったことも事実ではあるが……。

「必要経費よね。あのバーさん結構本格的だったし、今のところ全部当たってるし……」

ぶつぶつと呟くローザの指には、やけにリアルな硝子の瞳と三日月型に開いた口が怪しげな、可愛げのない人形がぶらさがっている。数時間前、評判の占い師がいるという噂を耳にして、ローザは彼女を訪ねていた。

「はあ？ 何ぞ仰りましたかいの？」

占い師のお約束な反応に、ローザは顔をしかめたが。

「だあかあ、吸血鬼の話が聞きたいんだってばっ！」

「はあ？ もう少し大きな声で言ってくれやしませんかのぉ」

「吸血鬼よ、きゅ、う、け、つ、き！」

「はあ……申し訳ありませんな、近頃耳が遠くなっ」

「……バーさん、その身代わり人形一つね」

「ハイハイ、銀貨一枚になりますよ、ありがとうねえ。で、何が

知りたいんだい？」

そう言つて、占い師のバーさんはニイツと白い歯を覗かせたのだつた。

「それにしても……流石に気味が悪いわね」

ローザは不安げに辺りを見回し、普段とはうって変わつて気弱な声で呟いた。

昼間の少女の前では強がつて見せたが、やはり人気のない裏通りというものは一人で歩いていて気持ちのいいものではない。これならゴロツキの溜り場を巡回しているほうが余程マシというものだ。昼間のように、たとえ複数の屈強な男たちを敵に回そうとも臆することはない彼女だが、常識では理解し難いもの、正体はつきりしないものは大の苦手なのだった。

今頃駅周辺の繁華街では、吸血鬼の噂などものともせず多くの人々が夜の営みを楽しんでいるのだらう。行きつけの酒場に足を運ぶ者、遊戯場でビリヤードやカードゲームに興じる者、水辺に寄り添つて愛を語らう恋人達。ここ一番の稼ぎ時と、懸命に大道芸を披露している者もいるかもしれない。

港を有するウinstoriaでは、日夜多くのものが市場を行き交う。宝飾品や日用品に混じつて最も数多く店先に並べられるのは、新鮮な食材の数々だ。事前に軽く食事を済ませてはきたものの、建ち並ぶ屋台や酒場・食堂の厨房から美味しそうな匂いを漂わせているに違いない様々な料理を想像すると、どうにも食欲をそそられずにはいられない。

「ビーフストロガノフとお、ハウレンソウのバター炒めとお、サーモンとマツシユの包み焼きとお、ポテトサラダとお、それにカモミールティーでしょ、んでデザートはあ……」

マツチ売りの少女よろしく幸せな妄想に浸りながら歩き、次の角を何気なく曲がったところで……突然、誰かがローザの肩に手を置いた。

「ひゃあああっ!？」

いささかみつともなく悲鳴をあげて跳び上がり、ローザは慌てて振り返った。

「な、何よいきなり、大きな声を出して……」

顔をしかめて立っていたのは、少女の面影が強く残る小柄な女性だった。淡灰色の制服に身を包み、腰には拳銃と金属棒を携えている。胸や帽子についている印章は、ラウール帝国旗を簡略化したものだ。どうやら警察官らしい。

「ああ、ビックリしたあ……驚かさないでくださいよ、お巡りさん」  
「驚かすも何も、そっちが気づかなかっただけじゃないの」

警官は頬を人指し指で搔くと、そんなことより、と続けた。

「一体こんなところで何をしているの？ 早く家に帰りなさい。吸血鬼の噂は知ってるでしょう？」

「え？ ええ、まあ……」

どうするべきか、ローザは少し迷った。捜査をやめる気は毛頭ないが、自分はまだ許可を取っていない探偵だし、今ここで警察を敵に回すのは得策とは思えない。それに彼女の言葉には職務に対する責任感や忠実さこそあれ、嫌味なところは微塵も感じられない。ここは素直に退いたほうがよさそうだ。

「すみません、仕事が遅くなっちゃって、つい近道をしようとして……」

「仕事熱心なのはいいことだけどね。残業も程々にしておきなさいよ」

「はい、わかりました……あの、申し訳ないんですけど、明るい所まで護衛をお願いできませんか？」

「ええ？」

警官は呆れたような声を出したが、

「仕方ないなあ……ま、いいわよ」

先に立って歩き始めた。

「あの、貴女はどうしてこんなところを巡回してるんですか？」  
後について歩きながら、ローザは警官に話しかけた。

「もつと人の多い場所とか、住宅街の方が、吸血鬼も人を狙いやすいと思うんですけど」

「ああ、ほとんどの人はそっちのセンで動いてるわよ。これは私の単独行動なの」

にこりともせず、彼女は答えた。

「今までの状況を見る限り、犯人は相当にズル賢いわ。わざわざ人が滅多に通らない場所で、誰にも目撃されずに人を襲ってる。明らかに待ち伏せよ。にもかかわらず、被害者の殺され方はいつも同じ、しかも狙われるのは若い女性ばかり……何か作画的なものを感じるのよ。まるで、本当は殺す対象なんて誰でもいいような……人を殺すことが目的じゃない、吸血鬼の噂を広めることこそが目的のようなね。それとも逆に、唯一人を殺すためだけの捜査攪乱を狙った偽装か……」

「へえ……凄いですね、何だか推理小説の主人公みたいです」

ローザが褒めると、警官は少し怒ったような表情になった。

「あのねえ、これは現実に起きている殺人事件なの。次に襲われるのは貴女かもしれないのよ？」

「す、すみません」

「まったく、これだから本部の人達が自由に動けないのよ。夜には出歩くなって言ってるのに、ほとんど誰も言うことを聞いてくれないし。そのクセ何かあったら私たちに責任転嫁するんだから。自分の身の安全くらい自分で確保してくれなきゃ、幾つ身体があっても足りやしないわ」

ぶつぶつと文句を言いながら、彼女はどんどん先に歩いていってしまう。少し読みを間違えたかな、と反省しながらも、ローザは警官の態度に好感を抱いていた。彼女は真剣に街の平和のことを考え、動いている。

しばらくの間、暗く狭い裏通りには二人の靴音だけが響いていた。歩きながら、ローザは今までに得た情報を整理した。

度重なる犯人の行動から、警察側もある程度の予測はたっている

ようだ。だが住民の不安を取り除くために、大多数の人員を無駄な警備に割かれてしまっている。この婦人警官のように独自の判断で行動している者もいるが数は少なく、未だ犯行現場を目撃した者はいない。被害者の数が増えるにつれて住民側の不安はますます募り、警備の増強が要請される……典型的な悪循環だ。

「……まあ、全員が貴女くらい楽観的でいてくれるなら、却って楽なんだけどね」

「えっ？」

唐突に、警官が快活な声を出したので、ローザは驚いて顔を上げた。

「吸血鬼だか何だか知らないけど、この街で悪さをするならただの犯罪者よ。絶対に捕まえてみせるわ」

そう言つて、彼女は不器用に微笑んで見せる。どうやらローザの沈黙を、怒られて落ち込んでしまったと取り違えたらしい。ローザは思わず相好を崩した。

「頼もしいですね。貴女みたいな人がいてくれるなら安心です」

「そう言ってくれると嬉しいわね。正直な話、上の人達はアテにならないから。賞金なんか出してみつともないっとならないわよね。だから教団なんかにつけ込まれるのよ」

聞き慣れない言葉を耳にして、ローザは眉をひそめた。

「教団……って何です？」

「ああ、知らないの？ 教団《光と闇の礎》のこと」

警官が意外そうに言う。最近引越してきたばかりですので、と付け加えると、彼女は親切に教えてくれた。

《光と闇の礎》……それは『太古の昔、人は神の御子であった。信仰と祈りによって、人は再び神の御子として覚醒する』という基本教義のもと、最近勢力を伸ばしてきている新興宗教団体だった。今回の事件については吸血鬼の出現を神の罰と考え、神の怒りを鎮めるためと、多数の神官・信者たちで自警団を結成して街を見回っているらしい。

ま、信者獲得のための宣伝活動ってとこかな。ローザは思った。自分なら天罰として人の喉を喰い破る吸血鬼を遣うような神を敬う気にはなれないが、警察が犯人を捕らえられない以上、人々の不安は募るばかりだ。中には宗教に走る者も出てくるだろう……警察への信頼と引き換えに。

やがて行く先に街灯の光が見えてきた。先に立って歩いていた警官が、この辺りでいいでしょう、と振り返る。

「じゃあ、私はこれで。気をつけて帰るのよ、何かあったら署にいらっしやい」

「はい、どうもありがとうございました。そちらも気をつけて下さいね」

ローザが言うと、警官は初めて屈託なく笑った。

「私みたいなつぽい女、吸血鬼が狙うワケないじゃない」

しかし彼女の笑顔は充分に魅力的だったし、去り際に振られた手には、美しい婚約指輪が光っていた。

表通りに出てしばらく歩くと、比較的大きなバス停留所が見えた。木目も見事な一枚板のベンチに腰かけ、軽く溜め息をつく。

辺りに人影はない。足元にはゴミ箱からあふれ出した紙屑が散らばり、頭上ではジジジ、と独特の音をたてる街灯の周囲を、数匹の蛾がひらひらと舞っている。薄ぼんやりとした黄色い光を頼りに地図とメモ帳を広げて、ローザは情報整理の続きと今後の方針の検討を始めた。

既に吸血鬼出現の可能性が高いと思われる場所には 印をつけてある。今までに吸血鬼が出現したとされる場所にはx印がつけてあるが、内三つは正確には『被害者の遺体が発見された場所』だ。目撃者がいない以上、必ずしも犯行現場とは一致しない。先程の婦人警官が言ったように犯人が智謀に長けているならば、遺体を別の場所に運んで捜査の攪乱を謀るくらいのはやりかねないだろう。人目につかないよう人一人を殺害し、尚かつ一晩の間に別の場所に



運ぶとなると、単独犯とは考えにくくなるが……。

教団《光と闇の礎》のことも気になる。自警団を結成して街を見回るといいうのは大いに結構なことだが、警官の口調から考えると警察と足踏みは揃っていないさそうだ。警察側が知らない何らかの情報を握っている可能性がある……調べてみる価値はある。

「捜査初日としてはこんなものかな……まだまだ情報不足だけどね」今日の日付けと捜査の経緯を簡潔に書き記して、ローザはメモ帳を閉じた。警官に横槍を入れられたのは計算外の出来事だったが、咄嗟の機転でうまい具合に話を聞くことができた。今夜は警察側の情報がつかめただけでもよしとすべきだろう。

警察の人間と自然に顔見知りになれたことも大きい。今後、彼女との繋がりが役に立つことがあるかもしれない。

「さって、どうしよっかなあ。今更別の場所に行く気にはなんないし、かと言って寝るには中途半端だし……酒場にでも行こっかな……

あ、この印……」

地図を畳もうとして、ローザは商業地域の一角につけられた印に目をやった。夕方に訪ねた占い師のバーさんが「今夜ここで何かが起きる」と言った場所……つまり、つい先程までローザがいた場所だ。

「何かが起きる……ね。ま、外れちゃいないか……ん？ ……あれ？」

ローザはふと、あの可愛げのない身代わり人形が手元にないことに気がついた。慌てて身体中のポケットを捜しても、出てくるのは財布やペンやメモ帳ばかり。

「あっちゃー、多分あのとときだわ……」

ローザは額に手を当てて星空を仰いだ。警官に肩を叩かれたとき、驚いて跳び上がった拍子に落としてしまったのだろう。

別にいらなただけどなあ……でも高かったし……。

ローザは迷った。これから金貨百枚を稼ごうというときにケチ臭い気もするが、一月銀貨三枚のアパートで暮らす今の自分にとって

は銀貨一枚と言えども大金だ。

「ええい、仕方がない。役に立つとは思えないけど……独り暮らしの鉄則その一、物は粗末にしないっ！」

かけ声と共に立ち上がり、ローザが裏通りに戻ろうとしたとき、風に乗って運ばれてきた微かな音に、ローザは一瞬その場に凍りついた。

「悲鳴？ まさか……」

口に出した言葉とは裏腹に、ローザの耳は確かにその音を捕らえていた。本当に悲鳴なのかどうかは、はっきりと確認することはできなかったけれど。

吸血鬼かもしれない。脳裏をかすめた考えに、ローザの心臓は高鳴り始めた。身体の芯の辺りが熱くなり、続いてゾツとするほどに冷たくなる。髪を揺らす夜風には、もう何も運ばれてはこない。

……と、風がやんだ。突然途方もなく深い洞窟の奥底に放り込まれたような静寂に、ローザの肌はあわだった。自分は今、夜の街に一人でいる。その現実が、恐怖という形をとってローザの胸を押し潰そうとする。

「……行くわよ、ローゼンシルレクター」

自らを奮い立たせて、ローザは声が聞こえてきた方向に歩き始めた。一步踏み出してしまえば後は楽だった。恐怖の対象が何かかわからないのなら、それを確かめればいい。自分はこうして動けるし、こんなにも落ち着いている。

ローザは元来た道を戻り、警官と別れた角から裏通りに入った。数ある別れ道を勘に任せて選択し、視界の利かない曲がりくねった道を進む。やがて十字路にさしかかり、そのまま真っすぐに通り抜けようとした瞬間、左の道の奥に人影が見えたような気がして、ローザは咄嗟に身体を翻した。十字路の手前まで戻り、左側の壁に背中をつける。いつでも銃が抜けるように右手を空け、そっと顔だけ出して様子を伺おうとし……ふと何か違和感を感じて、ローザは足元に視線を落とした。

ローザの足に踏まれていたのは、あの可愛げのない身代わり人形だった。どうしてこんな所にあるのだろう？ 一人でいたときも警官に会ってから、この十字路は通っていないはずなのに。

不思議に思いながらも人形を拾おうと身を屈めたのと、

ブォッ！

「……っ！？」

背中に鋭い痛みを感じたのが同時だった。今さっきまで自分の上半身があつた空間を、正面の闇の向こうから跳び出してきた《何か》が、猛烈な勢いで貫いていったのも。一瞬遅れて巻き起こった突風に、銀髪の切れ端が宙を舞う。

背後から、《何か》が勢い余って地面に激突する音が聞こえた。

「か、屈んでなかったら殺されてた……」

ローザの背筋を冷たいものが走り、両膝と両手のひらがカッと熱くなった。すぐ目の前に地面がある。いつの間にか倒れたらしい。腕も脚も、かろうじて身体を支えてはいるものの、ガクガクと震えるばかりでまるで言うことを聞こうとしない。

倒れていた《何か》が起き上がり、じりじりと間合いを詰めてくる。荒々しい息遣い。ポタポタと落ちるよだれ。何か硬い物がしきりに地面を削っている。今にも襲いかかってくる。若い女性の柔らかな肉を切り裂き、熱く甘い血を啜ろうと。このような状況に追い込まれて尚明晰なローザの頭脳が、かつてない早さで回転し始める。後ろにいるのは何だ。

おそらく人間ではない。

背中に負った傷。

この感覚は刃物によるものとは違う、鋭い爪でえぐられたようなものだ。

あの少女が言ったように、野獣の類か。

ならば接近戦では勝ち目が薄い、距離を稼いで……何だ？

不意に指先に冷たいものが触れ、ローザの思考は途絶えた。地面が濡れている。顔を上げると、強烈な血の臭いが鼻をついた。

視界の左端に先程の人影がある。壁に背を向けて道端に座り込んでいる……ピクリとも動かない。

「き……」

人影の周囲には水たまりのようなものがあり、時折何処からかしたたり落ちる滴が、ぴちゃん、ぴちゃんと音をたてている。

その人影の左手に光っている指輪には、見覚えがあった。

「貴様ああ……っ！」

グギヤアアアアッ！

ローザが銃を抜いて振り向き様に発砲した瞬間、けたたましい叫び声をあげて跳びかかってきたのは黒いコートを着た男だった。弾丸は目標から大きく左に外れ、建設中の建物の石材に火花を散らす。長く鋭利な爪を備えた男の右手が、身体の回転と共に空中になびいていたローザの銀髪を横薙ぎに斬り払う。無理な体勢に加えて弾丸発射の際の反動で後ろ向けに倒れたローザの目前に、男の異様に青ざめた顔と獣の如き牙が迫った。

ローザの瞳は氷のように冷たく透き通っていた。先程までの恐怖心は跡形もなく消え失せている。目の前の男が吸血鬼であろうとなかろうと、そんなことは最早さしたる意味を持たなかった。胸の前で銃を構え、男が喉に喰らいついてきた瞬間、相手の心臓を正確に撃ち抜く。続いて右の肺、左の肺を撃ち抜かれ、ローザの喉を咬み締めていた男の牙が外れる。ローザは右脚を折り曲げて膝を胸に引き寄せると、渾身の力を込めて男の胴体を前方に蹴り飛ばした。地面を突っぱねて上体を起こし、狙いすました一撃を放つ。

ぐらり、と男の身体が揺れた。驚異的にも両足で着地していた男は、弾丸に貫かれた額から盛大に血しぶきを迸らせ、倒れた。

静寂が訪れた。

長々と息を吐ききつて、ローザもまた仰向けに倒れた。光源としてはあまりに頼りない月明かりと星明かりが、今はやけに眩しく見える。

頭を横に巡らせると、あの可愛げのない身代わり人形があった。

ローザは人形を拾い上げ、

「前言撤回……役に立つじゃない、オマエ。でも、どうせなら……」  
既にことごとくれている警官に目をやった。

「彼女も守ってあげてほしかったわね」

そして、人形を懐のポケットに入れた。

……と。

突然聞こえた微かな物音に反射的に上半身を起こし、身構えたローザが見たものは、信じ難い光景だった。

二度と動かぬ骸と成り果てていたはずの男が、今、目の前でもがいている。苦しそうに呻きながらも、両手をつき、膝を立て、起き上がろうとしている。

ローザの中の常識は音をたてて崩れ去った。当然だ、発射した弾丸のうち三発は男の心臓と左右の肺を、最後の一発は脳を貫いているのだ。このようなことが常識で考えられるはずがない。

吸血鬼。茫然とするローザの頭に、その単語が改めて浮かんだ。男の胸と額の傷が、見る見るうちに癒え、塞がってゆく。ローザは我に返り、急いで残りの銃弾の数を確認した。

あと一発、か……。

先程と同じく、頭部を狙うしかない。できれば側面から、左右の眼球を貫くように。ローザの頭脳は最良の解答を弾き出していた。致命傷を与えることはできそうにないが、頭部への攻撃が時間稼ぎになることは実証済みだ。

今や傷口は完全に塞がり、起き上がった男が血走った眼でローザを睨んでいる。

グルウアアアアアッ！

血泡を吹いて襲いかかってきた男の爪を、刹那の差で跳んでかわす。動きが鈍い。多少なりともダメージが残っている？ 試しに放った回し蹴りが脇腹に深々とめり込み、男が苦悶の表情でうずくまる。……いける！

ローザが距離をとって男のこめかみに銃口を向けた瞬間、

ズドドドドオツ！

「なっ！？」

突如轟音と共に降り注いだ大量の石材や木材が、うずくまる男を下敷きにした。咄嗟に体勢を低くし、両腕を眼前に交差させて飛び散る破片から身を守ったローザは、それらが落ちてきたと思われる方向に目を凝らした。

誰かいる。十字路の一角、建設中の建物の地上五階ほどの高さの所に。小柄な少年のようなシルエツトが、絶妙なバランスで骨組みの上に立ってこちらを見下ろしている。だが誰何の声をかける間もなく、その人物の姿は闇に溶けるようにして消えてしまった。

「……何なのよ、一体……？」

動くもののなくなった裏通りに一人とり残されたローザは、しばし茫然としていたが、

カラン……。

目の前に降り積もった建材の山から小石が落ちる音を聞いて、露骨に顔をしかめた。いい加減にしてよ、もう。心の中で誰にともなく文句を言う。

コートの内ポケットから予備の弾丸を取り出して、弾倉に詰めるだけの余裕はあった。これであと六発。ゴトゴトと揺れ始めた建材の山に銃口を向け、ぴたりと静止する。

……と、建材の揺れが止まった。

「……………」

ローザが不審に思い、引き金にかけた指に力を込めた、そのとき。「こっちだ！ 誰かいるぞ！」

唐突に、背後の闇から声変り前の少年の声がした。続いて、大勢が駆け足で近づいてくる物音。ローザは驚いて振り返り、

ガラガラガラアッ！

「しまった！」

視線を戻したときには、もう遅かった。建材の山は崩れ、男の後ろ姿は闇に消えるところだった。

行きがけに、凄まじい殺気をみなぎらせた眼でローザを睨みながら。

……逃げられた。

緊張の糸が切れてその場に座り込んだローザの横を、

「吸血鬼だ！ 吸血鬼が出たぞ！」

「黒いコートの男だ！」

「そっちに逃げたぞ！」

「回り込め！」

何処から出てきたのかと思わせるほどに大勢の男たちが、先端に炎の灯った杖を手にして口々に叫びながら走り過ぎてゆく。ほとんどが青年や壮年の男たちだが、中には先頭切つて駆け抜けていった少年のように、まだ幼さを残した者の姿もある。浅黒い布を筒型に縫っただけの簡素な服装に混じつて、時折妙な模様の旗や派手な衣装が見え隠れする。

何なのよ、コイツら……。

ローザは呆気にと取られていたが、ふとあることに気づいた。

「……って、あたしの手柄を横取りするんじゃないわよ！ 待ちなさいってばっ！ 聞いているの、アンタ達！？」

ローザは怒りと屈辱に唇を咬んだ。手柄云々は本心ではない。彼等は誰一人として彼女の声に耳を貸さずに行ってしまったのだ。ローザだけではない。あの警官の亡骸にすら、まったく関心を払わずに。

シャリイイイ……ン……。

美しく澄んだ音色が、狭い裏通りの壁に幾重にも反響する。振り返ると、派手を通り越してド派手な衣装で全身を着飾った男が一人、警官の亡骸の前に片膝をついて錫杖を打ち鳴らしていた。片手で不可思議な印を結び、よく聞き取れないが経文のようなものを唱えている。やがて錫杖の音の余韻が闇に消える頃、男は立ち上がり、懷から通信機らしきものを取り出した。

「こちら自警団第一部隊、犯行現場を目撃しました。現在地は第四商業区域、犯人は黒いコートの男で身体と額に銃弾による傷を受けており現在逃走中、方角は特定できません」

自警団？　するとこいつらが教団《光と闇の礎》なのだろうか……それにしても、ローザは眉根を寄せた。

それにしても、今のは一体どういうこと？

「被害者は若い女性が二人。一人は警官と思われませんが、既に死亡しています。もう一人のほうは無事です」

男は事務的口調で喋り終わると、通信機を懷に戻してこちらを振り向いた。格好はド派手だが、落ち着いた雰囲気、初老の男だ。かなり背が高く整った顔立ちをしている。若い頃はさぞモテたに違いない。

「やたらと銃を振り回すのははしたないですな、お嬢さん。それに奴は物質兵器では倒せません。神の怒りを鎮められるのは神への信仰の力のみ……女の子は早く家にお帰りなさい」

嘲笑うような口調と傲慢な態度に、ローザの男に対する評価はガラリと変わった。唯一人あの警官の死を弔ってくれたのは嬉しいし、身なりから見て相当高い位にいるのもわかる。しかし、おそらくは信者や神官たちなのだろう他の男達の、死者をないがしろにしたあの態度。上に立つ者ならば、彼等の不調法はこの男の責任ではないか。それに……。

「どうしてあたしが銃で撃ったってわかるんです？」

とぼけた顔で尋ねられ、男は少しギョツとした様子を見せた。が、すぐに表情を元に戻し、うって変わって穏やかな口調で答える。

「先程銃声が聞こえましたし……それにほら、貴女、銃を持っていたらつしやるじゃないですか」

「ああ、これですか？」

とローザは手に持っていた銃を持ち上げた。ええ、とうなずく男の顔に、いきなり銃口を向ける。驚いた男が逃げる間もなく、ローザは引き金を引き……闇の中に、ポツ、と小さな火が灯った。



「よくできてるでしょう？ このライター。ほら、年代物だけどこやんと火もつくし」

啞然とする男の前にライターを突きつけて、ローザは更に問い詰めた。

「本物の銃なんて持つてゐるはずがないじゃないですか。だってあたし、女の子ですよ？ あたしが撃つただなんて……何処で、見てたんです？」

揺れる炎に照らされて、男の顔が歪む。だがそれは、炎のせいだけではなかった。

「は……はっはっはっ、何とも愉快なお嬢さんだ。どうやら私の勘違いだったようですな。ともかく無事で何よりです」

軽く笑い、男はどうか平靜を装ったが、その口元が引き吊っているのをローザは見逃さなかった。

「申し遅れましたが私、《光と闇の礎》の大神官、ワイアードと申します。もし何かあれば、いつでも我等が教会へとお越し下さい」  
今日はよく招待される日ね。思いながら、ローザも笑顔を返した。ただし、不敵な笑みではあったが。

「ローゼンシル・レクター……探偵よ」

口元に引き続いて目元をも引き吊らせたワイアード大神官の表情は、既に笑顔には見えなかったが、ある意味充分に笑える顔ではあった。

「で、では、吸血鬼を追わねばなりませんので、私はこれで。じきに警察が来るでしょうから、お嬢さんはそこで休んでいて下さい」  
ワイアードが去り、裏通りに静寂が戻ると、ローザは太股の内側に手を忍ばせた。

「意外な形で役に立ってくれたわね……普段は逆の使い方かしないんだけど」

取り出した銃とまったく同じ姿形のライターに、ローザは軽く口づけた。

ワイアードは休んでいろうと言ったが、正確な位置を知らない警察が自分たちを見つけるには時間がかかる。後々面倒なことにならないように銃とライターは懐と太股の内側に戻し、ローザは警官の亡骸を引きずって表通りを目指した。

無暗に曲がらず直進し、ほどなく表通りに出た頃には、騒ぎを聞きつけて集まった大勢の野次馬と、それらの人々をなだめすかして懸命に家に帰そうとしている警官達の姿があった。駆け寄ってきた数人の警官に亡骸を預け、医師達の制止を振り切って歩き出す。

身体が、頭がひどく熱かった。視界は不安定にぐらぐらと揺れ、些細な物音が頭に響く。野次馬でできた人垣を抜け出る頃には、ローザは全身汗だくになっていた。

熱い……何でこんなに熱いんだろ。

ついさっきまで肌寒くさえあったのに、今となっては夜風が恋しい。上着を脱ぎ、後ろ髪をまとめて束ねると多少ましになったが、それでも後から後から汗が吹き出てくる。

「……？ あれは……」

一日歩き通して疲労が蓄積していたこともあるのだろう、ふらつく脚を叱咤しながら、ともかくアパートに戻ろうと歩いていた途中、ふと街角に見覚えのある顔を見つけて、ローザは立ち止まった。

道端に止められた馬車のそばに細身の少女が一人、何をするでもなくたたずんでいる。満天に輝く星々を眺めながら、まるで誰かを待っているようだ。

「ユーノ……だったわよね」

名を呼ばれたことに気がついたのか、少女が振り向いてこちらを見、ゆっくりと歩み寄ってきた。それは確かに昼間に会った少女、優乃だった。

しかし、随分と雰囲気が違う。ローザは少し戸惑った。日傘とサングラスがないこともある。昼間とは一転して優雅な黒絹のドレスを着こなす姿は、まるで二十代後半の貴婦人のように大人びている。しかし、それらとはまったく別の……魔性の輝きを放つと言われる

宵闇に浮かぶ月のような、不可思議な魅力に満ちあふれている。昼間に見たときには、まるで陽の光の中で舞う花びらのようだったのに。

「こんばんは、ユーノ」

「こんばんは、ローザさん」

軽く挨拶を交わすと、疲労と倦怠に沈んでいた気分が心持ち楽になった。群衆のざわめきは耐え難かったが、優乃の涼やかな声は耳に心地好い。さっさと自分の部屋に帰るつもりだったが、ずっと一人だったところに知った人間に会えたことが嬉しくて、ローザはつい言葉を重ねた。

「どうしたの、こんな所で。《風渡る丘》って確か、ここからだと言の反対側でしょ？」

「ええ……そうなんですけど、せっかく街に出てきたんだからと思つて。これを」

と、優乃が取り出したのは、淡い緑の輝きを帯びた螢光硝子の眼鏡だった。

「他にもいいのが沢山あったんですけど、そんなに持ち合わせがなかったものですから。五時間もかけて選んだんですよ。……どうです、似合ってますか？」

帽子の前に取りつけられた黒絹の紗を上げて螢光眼鏡をかけ、優乃は華やかに微笑んで見せる。ローザは初め呆気にとられていたが、やがて吹き出し、クスクスと笑い始めた。

「????」

不思議そうな表情で優乃が見守る中、息を切らして喘ぎながらも顔を上げて目尻にたまった涙を指で拭う。

その螢光眼鏡は、確かに彼女によく似合っていた。かけた途端に大人びていた容姿が一気に少女のものに戻ってしまったけれど。

「うん、似合ってる似合ってる。……ははっ、何だか気が抜けちゃったなあ。ありがと、ユーノ。会えて嬉しいわ。でも……」

「でも？」

優乃が不思議そうに小首を傾げる。ローザは表情を引き締めた。  
「早く帰ったほうがいいわ。ここだけの話だけど、昼間言ってた連続殺人犯……あれ、本物の吸血鬼よ。あたし見たの。オマケに教団も何か絡んでるわ」

「教団……？」

優乃は吸血鬼のことよりも教団の方に関心を示したようだったが、ふと何かに気づき、表情をこわばらせた。

「……ローザさん、その怪我……」

「え？……ああ、これ？」

ローザは喉に軽く手を触れた。

「言ったでしょ？ 吸血鬼を見たって。そのときに咬まれたのよ」

優乃が蛍光眼鏡を外し、黒絹の帽子を脇に抱えた。手布を取り出して口をつけ、唾液を馴染ませてローザの首に手を寄せる。

「じつとしていて下さい、ローザさん」

「あ、うん……でも、そんなに心配しなくても大丈夫だと思うわよ。ちよっと咬まれただけで、血を吸われたわけじゃないし……」

傷口を拭われながら、ローザは軽い気持ちで笑っていたが、優乃の真剣そのものの瞳に見つめられて言葉を濁した。と、優乃の瞼がスツと閉じられたかと思っただ途端、

「えっ……？」

優乃がローザを抱き寄せ、胸元に口づけた。その生暖かい、甘美な快感にも似た感触に、ローザの頭の中は真っ白になった。優乃の薄紅色の唇が、暖かくなめらかな舌が、胸元から鎖骨の間、喉にかけてを丁寧に這う。流れる血を逆に辿り、やがて舌先が傷口の一つを探りあてると、優乃は唇をすぼめ、

「ん……っ」

傷口を吸った。信じられないほど、強く。

「……っ！？ ちょ、ちよっと！？」

されるがままに接吻を受けていたローザが、余りの痛みに我に返る。ローザは慌てて優乃の肩をつかんだ。だが華奢な外見に似合わ

ず、どんなに力を込めてもびくともしない……いや、違う。力が入らないのだ。まるで身体が、『優乃を拒絶すること』を拒絶しているかのように。

その間にも、優乃の唇は順に傷口を探り、吸ってゆく。交互に訪れる快感と痛み、ローザは為す術もなく立ち尽くし……やがて静かに唇を離すと、優乃はローザを見上げ、

「これで大丈夫です……後でちゃんと手当して下さいね」  
何事もなかったかのように微笑んだ。

ローザはしばらくの間、ぼうつとした瞳で優乃を見つめていたが、やがて唐突に自分たちの行為に気づき、慌てて身体を離れた。急いで辺りを見回し、誰もこちらを気にかけていないことを確認して、ホッと胸を撫で下ろす。

優乃は少し驚いた様子で目を瞬いていたが、

「……ローザさん」

またも詰め寄り、ローザの手を取って握り締めた。

「私が昼間あんなことを言っただけに、貴女を危険なことに巻き込んでしまって……」

「こ、これくらい、たいしたことないわよ」

戸惑い、しどろもどろになりながらも笑って言うと、優乃はゆっくりと首を横に振り、強い意志を秘めた口調で言った。

「お願いです。ローザさんはこの事件から手を引いて下さい。勝手だと思われるでしょうが……これは、私達の問題なんです」

「私達の？ それってどういうこと？」

ローザは面喰らった。自分の身を心配してくれているのはわかるが、それが何故『私達の問題』とやらに結びつくのか。

ローザは返答を待った。が、返ってはいなかった。

美しい瞳に哀しげな色をたたえ、思いを振り切るようにローザに背を向けると、優乃は駆け足で馬車に乗り込んだ。

「あっ……ちょっと、ユーノ！？ 待ってよ、さっぱり話がわからないわ！」

慌てて呼び止めるが、彼女は振り返らない。

「トーマス、お願い」

「はっ」

主の意に従い、御者がムチを振り上げる。夜の街角に鋭い音が響き、馬車は、去った。

静寂と共に、風が戻った。

茫然と馬車が消えた闇を見つめていたローザは、急激な冷え込みを感じてブルツと肩を震わせ、ふと先程までの熱が嘘のようにおさまっていることに気がついた。

全身の汗がひき、意識がシャンとしている。視界は安定し、聴覚も正常だ。記憶を探るうち、それが優乃の口づけを受けた後からだということに思い当たったのだが。

「まさか……ね」

今も胸の奥に残る甘い疼きに、自分が本当に体調を崩していたのか、それとも只の錯覚だったのか、ローザはよくわからなくなってしまった。

翌日。

ローザはウインストリア中心街にある酒場の片隅で、口にティースプーンをくわえながら、卓の上に並べられた地図や書類と睨めっこをしていた。

昼時をとくに過ぎ、夕暮れまでにはまだ時間があるので客の数は少ない。この時間帯の酒場に漂う都会の中心にありながら喧騒とは無縁な雰囲気、ローザは気に入っていた。今も四人がけの卓を一人で占有しているが、文句を言う者は誰もいない。たまに店員が卓の拭き掃除に来るくらいだ。

「お客様、少しよろしいですか？」

声をかけられ、ローザは顔を上げた。清楚なエプロン姿のウェイトレスがコーヒーマシンに乗せた盆を片手に立っている。この酒場の看板娘で、なかなか可愛らしい女の子だ。制服のスカート丈が短いのは店長の趣味だろうか？

「ふあひ？ あふあひふあひーはほんふあつへ？」

ティースプーンをくわえたまま尋ねると、ウェイトレスは、いいえ、と微笑んだ。

「当店からのサービスです。ここ最近、お客様には毎日来ていただいているので。それに、夜の忙しいときにはこういうことはできませんから……」

「ふえー……んっ、ありがと。でも、よく今のが聞き取れたわねえ」

ローザはコーヒーマシンを受け取り、ティースプーンをカップに入れた。「酔っぱらいの相手で慣れてますから。これから少し店内の掃除をしますけど、お気になさらずにごゆっくりどうぞ」

「うん。ふう、それじゃあ、ちょっと休憩……」

ローザはうんと伸びをし、両腕を前に投げ出して卓に伏せた。長い髪を指でいじりながらコーヒーマシンをすすする。

硝子板一枚隔てた窓の外では、人々がいつも通りの生活を送っている。馬車や路面電車に交じって最近普及し始めた自動車が行き交い、時折ブザーを鳴らして通行人を驚かせている。若い少年が母親に手を引かれて歩く一方で、こちらも息子なのだろう、壮年の紳士が杖をついた老女の手を引いて歩いている。

何もかも、かわりばえのない光景。まるで、昨夜の事件が嘘のような……。

「お客様、最近よく調べものをなさっているようですが、どうかなさったんですか？」

「ん？ そうね」

不意に現実に取り戻されたローザは、ウェイトレスが隣の卓の上を片付けているのを見ながら、ちょうど目の前にあったスカートの端をつまんだ。

「見えそで、見えないのよ……貴女のスカートの中身と同じでさ」

「きゃん！ もう、やめてくださいよ」

ウェイトレスが笑いながら文句を言う。その頃には、ローザは再び深い思考の海に沈んでいた。

昨夜の事件……商業区域の裏通りで遭遇した吸血鬼と、教団《光と闇の礎》について。

今朝早く、ローザは目撃者として自ら警察署に出向いていた。

氏名、年齢、住所、職業などの確認から始まり、どうして事件現場にいたのか、そして当時の様子など、事情徴収は淡々と進んだ。大半の質問には正直に答えたが、今回の事件を優乃から聞いて知ったことや吸血鬼との戦いの中で助けてくれた謎の人物、ワイアード大神官の不審な言動については一切触れなかった。一度首を突っ込んだ以上、ローザはこの事件に自分自身の手でカタをつけるつもりだった。

そして、事情徴収の後。応対してくれた刑事との別れ際に、ローザは教団《光と闇の礎》について尋ねてみた。すると、教団の神官・信者たちで結成された自警団は、いつも必ず警察よりも先に犯行現



場に現れることがわかったのだ。

教団と事件が深いところで繋がっているのは間違いない。立場上はつきりと口に出しては言わなかったが、刑事の口調にはそう確信している響きがあった。

そしてまた、ローザも同じことを考えていた。昨夜のワイアードの台詞、

「犯人は黒いコートの男で身体と額に銃弾による傷を……」

忌々しいが、あの吸血鬼の再生能力は高かった。ローザが最後に見たとき、銃弾による傷跡はほとんど残っていなかったのだ。血は上半身全体に付着していたし、辺りはかなり暗かった。何処かに隠れて最初から見てでもない限り、撃たれたのが額だと特定できるはずがない。

そしてもう一つ。吸血鬼を撃ったのがローザだと思った理由について、ワイアードの説明は理に適っているようだが、被害者の一人は警官なのだ。客観的に考えればローザが撃ったとは思わないだろう。

共謀しているのかどうかまではわからないが、教団の上層部、少なくともワイアードと名乗った大神官は、吸血鬼の行動を把握しているようだ。そして自警団という名目で結成した部隊を利用して、吸血鬼が逮捕されるのを巧みに妨害している。目的は、この騒ぎに乗じた信者の獲得と勢力の拡大といったところか。

「あら。タバコ、お吸いになるんですか？」

ウェイトレスの声が、再びローザを現実に戻した。いつの間にか、無意識の内に備品のライターをいじくってしまったている。

「ああ、ごめんなさい。壊しちゃ悪いわね」

誤りながら、ローザは灰皿の横にライターを戻した。

「タバコは吸わないわ、身体に毒なもの」

「あたしもです。苦手じゃありませんけどね……さて、お掃除終わりっ！」

ウェイトレスは雑巾入りのバケツを持つと、軽く会釈をして店の

奥に入っ ていった。

「元氣のいい子ね……」

呟き、ローザは手元の書類を手にとった。それは教団や吸血鬼と並ぶ今回の事件の大きな謎の一つ……太陽と月の魅力を合わせ持つ少女、優乃に関する調査書だった。今朝方、警察署に向かう途中で、私立の調査団体に依頼しておいたのだ。

橘Ⅱ優乃Ⅱジエクスクト 十七才 女性

《風渡る丘》在住

交通：巡回13番系統《クーン橋》下車

南へ徒歩およ

そ半刻

広大な屋敷の実質的な主人。二十代前半の男性使用人を一人住まわせているが家族はいない。住民登録は彼女自身が十五才の頃に行い、そのとき既に両親は亡くなっていたという。

莫大な財産を所有し、その財力は一地方領主にも匹敵すると想定されるが、彼女が巨額の取引をした記録はない。

サングラスと日傘を常備しており、それらの熱心なコレクターであることは商店街では有名な事実である。水際立った容姿と温和な性格から、評判は良好。しかし、常に単独で行動し、用事がすむとすぐに馬車で帰ってしまうことから、友人の類はいないものと思われる。

一時は使用人との恋仲が噂されたが、二人が絶対の主従関係にあることは誰の目にも明らかであり、すぐに消えた。しかし、真偽のほどは定かではない。

今回の調査では、彼女の屋敷での生活を知ることができなかった。

以上

「商売敵もこういうときには役に立つわね……ま、半日の調査じゃこんなものかな」

ローザは残りのコーヒーを一気に飲み干すと、書類と地図をまとめて鞆に入れて席を立ち、財布から数枚の銅貨を取り出して卓の上に置いた。

「お勘定、ここに置いてくねー！」

「あつ、はい！　ありがとうございましたー！」

店の奥からひよっこり顔を出したウェイトレスに手を振って、ローザは酒場を出た。

今日は他にも行くところがあるのだ。

### クーン橋。

ウインストリアを流れる全ての水路の源流に架けられた、この街に数ある橋の中でも最も巨大な石橋である。

街の外れに位置しており華やかさにはやや欠けるが、風光明媚で名高い《風と水の都》を一望できることから観光に訪れる者が多く、ここから街中を周遊して港へと向かう遊覧船の乗り場や、夏には流れに足をつけて涼みながら食事ができる洒落た店構えの喫茶店などが、粉引きの水車小屋に交じって建ち並んでいる。

そんなのどかな光景が、夕暮れの朱に染まり始める頃。調査書を頼りに路面電車に乗り込み、観光客に交じって《クーン橋》にて下車したローザは、街の中心とは反対方向へと続くなだらかな坂道を、観光気分に関わりながらゆっくりと登っていた。

《風渡る丘》と呼ばれる地域に足を踏み入れてすぐに、ローザは時の流れではない、土地柄による季節の移り変わりを目の当たりにすることになった。後にしてきた街は活気に満ち、人々の営みが街全体を暖かく包み込んでいたが、人家もまばらな《風渡る丘》には、一足先に秋が訪れていたのだ。

魔峰、霊峰の連なるクスウルの山塊を背後に控え、一年を通して冷涼な気候に育まれた樹々は、いずれも逞しく大地に根を下ろしている。幹や根の辺りからは茸が生え、落ち葉が絨毯のように敷き詰められた幅広の道のここかしこには、様々な木の実が埋もれている。

風が吹き、栗鼠やイタチが駆け回り、枝葉を揺らして涼しげな音をたてる。

歩き始めてから半刻も過ぎた頃には、人と擦れ違うこともなくなり……ローザの目の前には、橘Ⅱ優乃Ⅱジエクスクトの屋敷が森に抱かれ眠るようにしてひっそりとたたずんでいた。

一目でそれとわかる石造りの門。

広大な敷地の大半は緑に覆われ、形ばかりに境界を示す石垣は、身軽な小動物たちの格好の通路となっている。

奥へと続く道はずかに弧を描いた石畳。

沿道の花壇には季節の花が一面に咲き誇り、敷地の中程で左手に別れた道の行く先には、中央に憩いの場を備えた島の浮かぶ大きな池がある。水辺には幾つかの墓標が並んでいる様子も伺えた。この屋敷の代々の住人が、今も静かに眠っているのだろう。

神殿にも似た造りの館は、とても大きく美しかった。屋根から壁そして地面に至るまで、最も高い所で五階建ての館は半ば蔓草に覆われており、この地に過ごしてきた年月の長さを物語っている。玄関や数ある窓のそばには色とりどりの花が飾られ、蔓草や周囲の景色も相まって、本来の姿は荘厳華麗に違いない白亜の館を暖かみのある可愛らしい姿に彩っている。

馬車の姿は見あたらない。厩舎と共に館の裏手にあるのだろうか。何も知らない者が見れば花の女神の神殿とも思いそうな人気のない屋敷を眺め、優乃の明るい笑顔を思い起こしながら、ローザは考えた。

街から遠く離れた屋敷にひっそりと住む、花を愛する孤独な少女……そんな彼女が、どうして街の残忍な殺人事件に絡んでくるのだろうか。おまけにこの事件には本物の吸血鬼まで絡んでいるのだ。およそ彼女ほど《邪悪》や《魔性》といった類のものと縁遠い人間もいなさそうなものなのに。

ローザは優乃のもう一つの顔をも思い起こしていた。昨夜の別れ際に見せた悲しげな表情。屋敷に招待してくれたときの嬉しそうな

笑顔や、初対面のローザに御辞儀をした後の微笑みからは余りにもか  
け離れた、強い意志と決意を秘めた、あのまなざし。

「これは私達の問題なんです、か……」

呟き、ローザはふと、また自分がライターをいじっていることに  
気がついた。これは考えごとをするときの父親の癖だ。小さい頃か  
ら見ていたせいか、いつの間にか身についてしまい、直せずにいる。  
「やれやれ、あたしも完全に逃げられたってワケじゃないのか……」  
自嘲気味に微笑み、ライターを懷に戻して、ローザは館に背を向  
けた。

今日この場で優乃を訪ねるつもりはなかった。折角招待してくれ  
ているのに、疑いのまなざしを向けて好意を踏みにじるような真似  
はしたくない。

「また来るわ、ユーノ。今度は探偵としてじゃない、貴女の友達と  
して、ね」

背を向けたまま小声で告げて、ローザは屋敷を去った。

数刻の後。

月明かりに照らされた石畳の道を、真紅のレザードレスを身にま  
とった華奢な少女が一人、大きな鞆を片手にゆっくりと歩いていた。  
「今年もよく咲いたわね……」

見事に花を咲かせた植物の数々を満足気に眺めながら、夜風に流  
れる髪をそつと撫でつける。両の瞳は髪と同じ艶やかな栗色、薄く  
笑みをたたえた唇は薄紅。この広大な敷地と館の主人、橘〓優乃〓  
ジエクスクトである。

「そう思わない？ トーマス」

親しげに、振り返りもせず語りかける優乃の背後で、闇が揺らい  
だ。しばしの後、優乃の声に命を吹き込まれたように、闇が一人の  
男の姿を象る。

「……やはり、私は反対です」

人の姿をした闇……トーマスと呼ばれた男は、咎めるような口調

で言った。

「お嬢様にこのようなことは似合いません」

「私の他に、誰がやると言うのですか？　これは我々に課せられた使命なのです」

「私は……いや、僕は君に、普通の生活をしてもらいたいんだ、優乃」

低く落ち着いていたトーマスの声に、急に若々しい響きが混じった。主に仕える執事の如く丁寧だった口調も、妹を心配する兄の如きそれへと変化している。

「血や家に捕われずに、一人の女の子として幸せをつかんで欲しい。いつまでもこんな屋敷に閉じこもってないで……」

「トーマス！」

優乃の悲鳴にも似た叫びに、トーマスはハッと言葉を切り、地に片膝をついて深々と頭を垂れた。

「……申し訳……ごさいません、お嬢様……」

「もうよい……おさがりなさい」

「……はっ」

トーマスの姿が、輪郭を失い闇へと還る。

しばしの静寂の後、優乃は手元の白薔薇を一輪手折ると、花を下向きにして顔に近づけた。茎をつかむ指先が棘に傷つき血を流し、わずかに青の混入した赤に……赤紫に……白薔薇を染めてゆく。優乃は薔薇にそっと口づけると、鞆の蓋を開いて中に入れた。

一輪、また一輪。

次々に手折られる白薔薇は、乙女の血と口づけを受け、赤紫に染まっていた。

「あのですねえっ、私、とおーっても不幸なんですよ！」

カウンターに両手をついて、ローザは少年の顔を覗き込んだ。

「父は会社を潰して自殺しちゃったんです！ 母はショックで寝たきりになっちゃうし、他にも幼い弟たちがあ……オイオイオイオイッ」

教団の教会は、繁華街からそう遠くないところに建てられていた。教会と言うと古めかしく質素なものと思われがちだが、新興宗教団体である《光と闇の礎》の教会は、四階建ての比較的近代的な建物だ。敷地は広くとっており、公園並みに緑が多い。宗教色を抑えてあるのは一般の人が訪れやすいようにとの配慮なのだろう。門は常にか開かれており、散歩をしている老人や、元氣良く駆け回っている子供たちの姿もある。

時刻はそろそろ夕暮れを迎えようかという頃。教会を訪れたローザは、受付係の少年信者を相手に大演説の真っ最中だった。

「……つまり、倒産で、自殺で、寝たきりで、家賃滞納で、不治の病で、手抜き工事で、日照権侵害で、騒音問題で、ノイローゼで、賃金カットで、セクハラで……えっと何でしたっけ？」

「借金返せないと、私、スケベじじいと結婚しなきゃなんないんですよ！ ねえ、ひどいと思いませんか！？」

ローザは胸の谷間を強調するように腕を寄せ、潤んだ瞳で少年を見上げた。こんな時のために、シャツの胸元のボタンは予め外してあったりする。やや過剰気味な演出だが、神を信じる純真な少年には十分な効果を発揮したらしい。受付係の信者は慌てて視線を逸らすと、顔を真っ赤にしてパンフレットとペンを差し出した。

「か、神様はきっと貴女のお力になってくださいますっ。こ、こちらにお名前を御記入の後、中へお入り下さいっ」

「中に入っちゃえばこっちのもんよ。あ、妹がグレて家出したつてのを忘れてたな……」って、それはあたしか」

受付を過ぎると、ローザは手早く身だしなみを整えた。胸元のボタンをきつちりと止め、長い髪を背中であぐる。

「さて……行きますか」

ローザは教会の奥へと進んだ。パンフレットを片手に、堂々とした足取りで、ゆっくりと。こそこそしては、却って怪しまれることになる。

廊下の両側には幾つもの部屋が並んでいた。それぞれの部屋では神官が一人ずつ教壇についており、予想以上に多くの人々が教義を受けている。やはり吸血鬼の噂の影響だろうか。あるいは、世の中にはローザが思っている以上に不幸な人が多いのかもしれない。

入口に立つて様子を伺っていると、こちらに気づいた一人の婦人に中に入るよう勧められた。ローザは丁重に断り、更に奥へと進んだ。信者や神官たちの目を盗んで、関係者以外立入禁止の看板の横をすり抜ける。

次の角を曲がったところには上り階段があり、二階に出た途端、建物の様子が一変した。外観や一般人が入れる場所に比べて、遥かに質素な造りになっている……いや、みすばらしいと言ったほうが適當だろうか。

流石に関係者以外立入禁止の区域だけあって、どの部屋の扉にも鍵がかけておあり、そう簡単には中に入れそうもない。しばらく進み、探索の手が三階に伸びたところで、ようやく鍵の壊れた扉を見つけた。ローザは周囲に誰もいないことを確認し、扉に耳をつけた。人の気配はない。音をたてないよう慎重に扉を開け、素早く中に入り込み、後ろ手に扉を閉める。

倉庫らしき部屋だった。天井は高く、二階分はありそうだ。日用雑貨や非常食の他、儀仗、教団の紋章の刺繍が施された旗、燭台など儀式に用いられるらしい道具の数々を納めた棚や、あの派手な衣装が入っているのだらう衣装箆筥、その他天井近くまで積み上げら



れ布を被せられた荷物の山が、迷路のように立ち並んでいる。

ローザは部屋を調べ始めた。しんと静まり返った部屋の中、規則正しく微かに響く足音が、とある一角に到ったところでぴたりと止まる。

「……これは……」

ローザが足を止めたのは、幾つもの皮袋が並んだ棚の前だった。落ち葉や木の実を拾い集めるのにでも使いそうな粗末な材質の袋だが、その割には妙に厳重な封が施してある。試しに幾つか持ち上げたところで、ふとローザの手が、他とは明らかに異なる重さを感じ取った。ジャラン、と独特の音が響く。

ろくなもんじゃないわね、この教団は。ローザは顔をしかめた。それとも宗教団体ってやつは、どこでもこんなもんなのかしら？

「それにしても、随分と管理が甘いわね……」

皮袋をつかむ手を離し、溜め息混じりに呟いたとき。

コツ、コツ、コツ、コツ……。

「……………」

ローザは全身を緊張させ、音のした方向を振り向いた。出入口の扉の向こう側から小さな足音が近づいてくる。誰かが廊下を歩いているのだ。ローザは手近な棚の陰に身を潜め、息を殺して、廊下を歩く何者かが通り過ぎるのを待った。

足音が扉の前を通過した。そのまま徐々に小さくなってゆき、やがて消える。ローザは安堵の溜め息を洩らし、棚の陰から出た……途端。

誰もいないはずの背後から、ローザの肩に手が置かれた。

微かな物音を耳にして、エリオン神官見習いは立ち止まった。

今しがた通り過ぎたばかりの倉庫に使われている部屋の中からのようだ。振り返って見ると、扉の鍵が壊れていることに気がついた。あの部屋の鍵は、以前から壊れていただろうか？

エリオンは不審に思い、足音を忍ばせて部屋の前に戻った。静か

に扉を開けて、中の様子を伺う。誰もいない。

「……誰かいるのですか？」

尋ねてみても、応える者はない……物音もしない。

気のせいかな……？

もつとよく調べてみようとして、エリオンが部屋の中に進み出たとき。不意に廊下の角の向う側が騒がしくなった。誰か来る。神官の許可もなくこんな所にいては、あらぬ誤解を招きかねない。エリオンは素早く身体を翻して部屋を出ると、扉をそつと閉め、何食わぬ顔で立ち去った。

しばしの後、数人の足音と談笑が近づき、また遠のき……辺りに静寂が訪れた。

……と。

バタンツ！

「……ツハアツ、ビックリしたっ！ いきなり後ろから肩叩くんだもん！」

衣装箆笥の扉が勢いよく開き、中から二つの人影が飛び出した！

「って、何で貴女がこんな所にいんのよ、ユーノっ!？」

「はぁ……」

ローザの胸に顔を埋めるようにして抱きかかえられていた優乃は……そう、ローザの肩を叩いたのは優乃だったのだ……しばらくの間ぼーっとしていたが、不意に頬を赤らめると、

「ローザさんって……意外と胸が大きいんですね」

恥ずかしそうに微笑んだ。

少し後。

荷物の山から引きずり下ろされ、床に敷かれた毛布の上で、ローザと優乃は向かい合わせに座っていた。

「……つまり」

ローザは念を押すように言った。

「今日も用事があつて街に出てきた貴女は、道端で信者から勧誘を

受けて、断り切れずにこの教会まで連れてこられた。何とか信者の目を盗んで教室からは出たものの、外に出る道がわからない。迷っているうちに誰かに見つかりそうになって、咄嗟にこの部屋の中に逃げ込んだ、と……こういうことね？」

「ええ、そうです」

優乃が軽くうなずく。ローザはガツクリと肩を落とした。

「あたしのあの苦労は何だったのよ……」

彼女の話の全て信じたわけではない。しかし、話自体には真実味がある。そう、わざと勧誘を受けるという方法もあったのだ。受け付けを通さなければ、あるいは名簿に名前が残ることもなかったかもしれないのに。

「……あの……？」

一人苦悩しているローザに、優乃がためらいがちに声をかける。

「え？ ……ああ、何？」

後悔はひとまず棚上げにして聞き返すと、優乃は安心したように微笑んだ。

「ローザさんは、どうしてここにいらっしゃるんですか？」

「……それは……」

ローザは返答に詰まった。至極当然の質問だったが、答える用意をしていなかった。

どうしようか。ローザは迷った。迷ったが、今更じたばたしたところでのうなるものでもない。ローザは表情を整えると、優乃の瞳を真正面から見据えた。

「ユーノ、よく聞いて頂戴。あたしはここに、今回の事件の犯人を捕らえるために来たの。貴女が嘘をついてるとは言わないけど……」  
そこまで喋って、優乃の服装に視線を落とす。

今日の彼女は随分と活動的な格好をしていた。大きな鞆とサングラスは相変わらずだが、いつものドレス姿ではなく、全身にフィットした黒地のアンダースーツの上から裾が股下まであるゆつたりとした上着を着込み、ベルトで腰を締めたラフスタイル。頭には帽子

の代わりにバンドナが巻かれ、シーフかロックバンドの紅一点といった雰囲気に仕上がっている。

「その格好、どう見ても普段着には見えないわね。貴女もあたしと同じ目的で、ここに忍び込んだんじゃないの？」

「……ローザさん、貴女も御存じの通り、ここに居るのは人間ではない魔性のものです」

優乃のぼんやりとした仮面の下から、真剣な表情が顔を出す。

「悪いことは言いません。どうか、この件から手を退いて下さい。これは」

『私達の問題なんです』

二人の声が重なった。優乃が驚いて口をつぐむ。

「……でしょ？ 言うと思ったわ。でもね、ユーノ」  
優しく、だが強い口調で、ローザは言った。

「この事件はもう、あたしも含めて、たくさんの人を巻き込んでしまっているのよ。だから退けない……探偵としても、あたし自身としても。だからね、ユーノ。この事件はもう貴女達だけの問題じゃない、あたし達の問題なのよ」

優乃は大きく目を見開いた。

「私と……一緒にいてくれるのですか？ 私が誰でもかまわないのですか？」

「興味がない、って言う嘘になるけど。仕事でもないのに他人のことを詮索するのはあたしの趣味じゃないし。少なくとも、敵じゃないとは信じてるわ……それともあたしを殺したりする気？ 一回マジで戦ってみる？」

「こ、殺すだなんて、私はそんなこと……!!」  
「……ゴメン、ちょっと言い過ぎた」

ローザは表情を和らげると、青ざめる優乃に素直に詫びた。

「あたしもさ、この街じゃ、まだ貴女と同じで一人っきりのよ。だから協力して欲しいの……お願いできるかしら」

「ローザさん……」

優乃はしばらく考え込んでいたが、やがて一つ大きく溜め息をつくと、右手を差し出し、おずおずと微笑んだ。

「よろしく願います」

「こちらこそ！」

ローザは差し出された手を握り返すと、勢いよく立ち上がった。

「さて！ そうと決まれば、こんな所に長居は無用ね。パツと見た感じ、吸血鬼の手がかりもなさそうだったし……もしあったとしても、これ全部調べてたら何日もかかっちゃうわ。行きましょ、ユー」

「行くつて、何処にですか？」

「そうね……」

優乃の手を引いて立ち上がらせ、辺りを見回す。やがて天井の採光窓に目を止めて、ローザはニツと微笑んだ。

「まずは上に行きましょうか。定番だけどね」

屋上に人はいなかった。

周囲に教会よりも高い建物はない。ここならば誰かに見咎められる心配はなさそうだ。

窓の隙間から顔だけを覗かせて様子を伺っていたローザは、下にいる優乃に手招きすると、窓を限界まで開き、縁に手をかけて懸垂の要領で一気に屋上に出た。まず鞆を受け取って、後から来た優乃を引っ張り上げる。

互いの衣服の汚れを手で払うと、二人は適当な場所に腰かけ、休憩をとった。

陽は既に沈んでいた。南の山脈の稜線近くに薄く雲がたなびいており、西からの夕陽の名残に照らされて、鮮やかな紫に染まっている。

夜と秋の気配が相まって、風は涼しい。

「綺麗ね……」

呟き、ローザは何となく可笑しくなった。

「変ね、あたし最近、随分と感傷的になったみたい。綺麗なんて台詞、前は滅多に使わなかったのに……この街に来てから、もう何回言ったかわかんないわ」

「ウインストリアは美しい街ですから」と優乃。

「でも確かに綺麗ですね。私、普段は星空ばかり見てるから、何だか新鮮な気分です」

「星空かぁ。あたしはそっちのほうが見てないわね」

ローザは背負っていた小型のリュックを下ろすと、荷物の整理を始めた。

「こないだは遅くまで起きてたけど、空を見てる余裕なんかなかったからなあ。あ、そう言えば、ユーノって夜に会ったとき雰囲気違ってたわよね。あれってどうして？」

優乃はサングラスを外して、紫から紫紺、そして紺へ、刻一刻と表情を変えてゆく空を眺めていたが、ローザの問いに振り向き、

「私、夜のほうが強いんです」

冗談めかして言った。

「ふーん、そうなんだ。ちょっと意外ね。夜が強いなんて、まるで

……」

言いかけて、ローザはハッと言葉を切った。

沈黙が落ちた。

にわかに風が強くなり、二人の間を吹き抜ける。

「……まるで？」

抱えた膝に頭を乗せた格好で、優乃が悪戯っぽく微笑む。

「え、えーっと……な、何でもないわよ！」

ローザは慌ててごまかし笑いを浮かべ、両手を顔の前で振ろうとした。

「何でも……あっ!？」

リュックの中に突っ込んでいた手を抜いた弾みに、中から赤い缶が飛び出した。咄嗟に手に持っていた何かを放り出し、缶が床に落

ちる寸前に両手で受け止める。

「ま、間に合ったあ……」

缶の無事を確認して、ローザは深々と安堵の溜め息をもらした。

「???? 何なんですか、それ？」

優乃が不思議そうに缶を見つめる。

「秘密兵器よ……それもすごい危険なヤツ。あゝ、寿命が縮んだわ」

ローザは缶をリュックに入れると、しっかりと口を閉じて背負い、先程放り出してしまった物を拾いに行った。

少し離れた位置にある天窓のそばに落ちていたのは、あの可愛げのない身代わり人形だった。一度は命を救われたこともあって手離す気になれず、かと言って肌身につけて持ち歩くには趣味が悪いので、リュックの中に入れておいたのだ。

ローザは人形を拾い上げ、ついでに何気なく窓の中を覗き込んだ。

「……………!」

そろそろと顔を戻し、その場に座り込む。両手で人形を目の前に掲げ、ローザは、小声で叫んだ。

「やっぱ役に立つじゃない、オマエ!」

人形をひとまずポケットに突っ込んで、もう一度中の様子を伺う。間違いない。

部屋にいたのは、ド派手な衣裳に身を包んだ初老の男……教団《光と闇の礎》の大神官、ワイアードであった。

下の部屋は、どうやら書斎らしかった。

今まで見てきた場所に比べて格段に豪勢にしつらえてあり、壁際に並ぶ書棚や、部屋の中央に備えられた卓と椅子は、美しい光沢を放つ黒檀製の高級品だ。床には絨毯が、壁には緞帳が張り巡らされ、いずれも教団の紋章が刺繍されている。

ワイアードは今、部下と思われる数人の男たちと共に卓を囲み、何やら熱心に話し合っているところだった。天窓の硝子は防音効果

に優れているらしく、声は聞き取れない。だがそれは、相手側から  
も外の音は聞こえないということ。余程大きな物音をたてたりしな  
ければ、気づかれることはないだろう。

「ローザさん？　どうかなさったんですか？」

振り返ると、優乃がすぐそこまで来ていた。静かに。まっすぐに  
立てた人指し指を唇に当てる仕草で、ローザは意思を伝え、もう片  
方の手で天窓を指差した。優乃がキョトンとした表情で窓の中を覗  
き込み、小声で尋ねる。

「あの方たちは……？」

「多分、この上層部の連中ね。大神官と、その取り巻きつてここ  
かしら」

「大神官」

確認するように呟き、もつとよく見ようと、優乃が大きく身体を  
乗り出す。ローザは慌てて優乃を引き戻し、耳元にささやいた。

「見つかったら元も子もないわ。このまま待つて、奴らがいなくな  
つてから中に入る。いいわね？」

「はい……でも、よくここに上層部の方たちがいることがわかりま  
したね」

「偶然よ、偶然。運が良かったのよ」

ローザはポケットに入っている身代わり人形を、服の上からそっ  
と押さえた。

「何せあたしには、ちょっと可愛げのない幸運の女神がついてるか  
らね」

「はあ……？」

優乃が曖昧な表情で首を傾げる。まだ何か聞きたげな優乃の唇に  
人指し指を当てていさめ、リュックの中からコートを引っ張り出し  
て、ローザは優乃と肩を寄せ合って座った。二人で一つのコートに  
身を包み、じっと待つ。

ワイアードたちが会議を終えて書斎を後にしたのは、二人が屋上  
に潜んでから半刻余りが過ぎた頃だった。既に西の空からは夕陽の



名残が失われ、天頂近くに昇った月が、周囲の雲を淡く輝かせている。

二人は行動を開始した。

ローザの持ち込んだ数々の道具で天窓をこじ開け、ロープの一方を適当な場所に固定し、もう一方を部屋の中に放り込む。まずローザが慎重に、続いて優乃が宙を舞うように素早く、書斎の床に降り立つ。

部屋の探索を優乃に任せると、ローザは適当な大きさの本を書棚から拝借し、ロープの端に縛りつけて窓の外に放り出した。天窓を開放したままなので完璧とは言えないが、侵入の形跡の一部は隠滅できた。多少の時間稼ぎにはなるだろう。

「こっちはこれでよし、と……ユーノ、どう？ 何か見つかった？

……ユーノ？」

優乃は部屋の中央の卓に片手をつき、一輪の花を額の前にかざしていた。じつと瞳を閉じたまま、静かに呟く。

「扉……があります」

「扉？」

「はい」

優乃はおもむろに目を開けると、花を卓の上の花瓶に戻した。書斎の両壁に並ぶ書棚の一つに向かい、迷いなく一冊の本を取り出して、その奥に手をつ込む。

ガチリ。

優乃の背後、部屋の反対側の壁の辺りから、小さく鈍い音が響く。驚いて振り向き、ローザは茫然と目を瞬いた。如何なる仕掛けか、大小様々な本がぎっしりと詰められた、一体どれほどの重量があるのか見当もつかない黒檀製の書棚が、滑るように左右に分かれてゆくではないか。

「……隠し扉か……こんなものまで造ってたとはね……」

やがて書棚は動きを止め、奥から扉が姿を現した。頑丈そうな金属製の扉だ。

扉の前まで歩み寄り、ローザは辺りに埃一つ舞っていないことに気がついた。扉の周囲の壁と更に外側の壁との色合いには大きな差があり、絨毯にはくつきりと書棚の跡が残っている。どうやら長い間使われることなく放置されていた仕掛けのようだ。しかし最近になって、この仕掛けを頻繁に作動させている者がいる。

ローザは扉の取っ手を回してみたが、どうやら鍵がかけられているらしい。押しても引いてもビクともしない。試しに鍵穴破りを試みたが、不慣れな作業である上に暗くて仕掛けがよく見えず、徒労に終わった。

「ダメだわ、開かない……先に鍵を見つけなきゃいけないみたいね」  
作業を諦め、ローザは鍵を捜すべく立ち上がった。

「それにしてもユーノ、よく隠し扉の仕掛けが……」

「ローザさん、靴をお願いします」

「えっ？ ……ちよつと、ユーノ？」

戸惑うローザに靴を手渡して、優乃は扉の前に立った。まるで無造作に、扉に両手のひらをあてがう。

そして。

彼女は、静かに、力を込めた。

書斎は沈黙に包まれていた。

先程のものと同様の、しかし遥かに重く、そして長い沈黙だった。  
ギイイ……ッ。

微かな風に隠し扉の残骸が揺れ、蝶番が渴いた音をたてる。

「……………」

ローザは頬に触れた。ぬるりとした感触。指先を見てみれば、そこは赤い。これは血だ。飛び散った扉の破片に傷つき流れ出た、紛うことなき自らの血だ。

……では、彼女は。壊れた扉、その奥に覗く暗闇の前に立つ、無傷の彼女は。立ち尽くすローザの目の前で、彼女は振り返り、にっこりと微笑んだ。

「さあ、行きましょう、ローザさん」

それは可憐で、健気で、可愛らしい微笑みだった。邪心の欠片もない、何の疑いも企みも感じさせない、素直で純粋な微笑み。ローザは知らず後退っていた。優乃の表情から微笑みが消え、次いで、深い悲しみの色が浮かぶ。それも、やがて消えた。

疑ってはいけない。信じなければならぬ。少なくとも、敵じゃないとは信じてるわ………ついさっき自分が言った台詞が、脳裏に浮かび消えてゆく。だが。

優乃は落ち着いたまなざしでローザを見つめながら、ゆっくりと近づいてきた。その瞳に、薄闇の中にも際立つ華奢な肢体に、かつて見た不可思議な魅力が満ちてゆく。ローザの胸の内に消したはずの疑念と、そして否定しようのない恐怖が浮かび上がってきた。

……この子を本当に信じていいの………？

一瞬の躊躇いが、抵抗の機会を奪った。優乃の伸ばした両手が、ローザの頬にそっと触れる。瞬間、ローザは身体が自分のものになくなったような錯覚に陥った。膝が砕け、手は預かっていた鞆を取り落とす。満足に呼吸もできず、声など出せるはずもなく。床に両膝を突いて尚、顔を背けることも、視線を逸らすことすらできない。まただ。ローザは戦慄した。あの夜と同じ。意志では逃れようとしているのに、身体は優乃を……月の魅力あふれるこの少女を………求めている。

しなやかな髪が頬に触れた。少女の左手が首筋から背中にかけてを優しく撫で、右手は肩から胸のふくらみを越えて、上着の内側に滑り込む。焦らすように肌をまさぐる指先が、脇腹に至ったところで何かを探り当て、動きを止めた。

……銃だ！

気づいたときには、もう遅かった。肩に吊り下げていたホルダーから、銃が素早く抜き取られる。月の呪縛から解放たれ、考えるよりも早く奪い返しに動いた手は、銃ごと優乃の手に絡め取られた。「ローザさん………もしも、ですよ」

感情が抜け落ちたように無機質な口調で、優乃が尋ねる。

「もしも私が人間じゃなかったら……どうします？」

そんなことは関係ないわ。咄嗟に浮かんだ台詞を、しかし、ローザは口にはすることはできなかった。声に出して言ってしまうえば、自分と優乃、両方に嘘をつくことになる。

すると何を思ったのか、優乃はローザの手を握り締めたまま、銃口を自らの胸に突きつけた。

「私を……殺しますか？」

……パァン！

突然頬に衝撃を受けて、優乃はその場に倒れた。床に投げ出された格好のまま、茫然とした表情で頬を押さえる。

奪い返した銃をホルダーに納め、ふらつく脚で立ち上がったローザは、肩で荒々しく息をつきながらもキツと優乃を睨みつけた。

「そんな泣きそうな目で殺すの殺さないの言うんじゃないわよ！ 貴女はそんなに生きることが嫌いななの！？」

「……そ……」

優乃の瞳から、みるみる大粒の涙が沸き上がり、ポロポロとこぼれ落ちた。

「そんなこと……そんなことないです！ 私、お花も動物たちも、人も生きること大好きです！ でも……でも、私はみんなとは違うから……」

「みんなって誰よ！？ あたしはローザで、貴女はユーノでしょう！？ あたしは《みんな》なんかじゃないのよ！」

吐き捨てるように言い、ローザは優乃の前に膝をついた。すぐ目の前で怯えと戸惑いに揺れている瞳には、もうあの不思議な輝きはない。胸に熱いものが込み上げ、潤む瞳を隠すように、ローザは乱暴に優乃を抱き寄せ、抱き締めた。

「ローザ……さん……？」

詫びる言葉はなかった。自らの腕に爪を立て、その中にいる少女を折れそうなほどに強く抱き締めて。ローザは耐えた……だが。おずおずと、やがてしつかりと、腕の中の少女に抱き返されて。声を押し殺し、全身を激しく震わせて、ローザは、泣いた。

暗闇の奥には、小さな部屋があった。

ほぼ正方形の床。

低い天井。

元々は普通の部屋だったものを流用しているのではなく、最初から隠し部屋として造られたのだろう。書斎から続く通路と同様、内装にはほとんど手が加えられておらず、建材が剥き出しになっている。

家具の類はない。窓も通気孔すらもなく、空気は澁み、重い。

それは部屋というよりも、むしろ牢獄に近い空間。そしてそれを証明するかのように、闇に捕らわれた者の姿があった。

「……何よ、これ……」

懐中電灯を片手に、ローザは呟き、ごくりと音をたてて生唾を飲み込んだ。

部屋の中央部に備えつけられ、全面に得体の知れない紋様が刻み込まれた円形の台座の上に一人の男が横たわっている。黒いコートの上から拘束具で台座に縛りつけられ、更に呪符らしき札を全身に張りつけられて。死者の如く青ざめた肌の男が……かつてローザと死闘を演じた吸血鬼が、身動き一つせずに、眠っている。

「吸血鬼……つてのは、棺桶の中で眠るもんだと思ってたけど……」

長い髪を掻き上げて呻くローザと、

「……儀式魔術……」

震える声で呟いて、優乃が円形台座の紋様に触れた。

「わかるの、ユーノ？ この妙な模様とか、お札とかの意味が」

「はい……この台座に刻まれているのは、対象の自我を破壊する魔法陣……そしてこの札は術者の思念を長期間残留させ、対象に送り込むためのものです」

美しく整った顔を嫌悪に歪めながら、努めて冷静に説明する。

「それって、もしかして……」

ひどく不吉な、しかしそうとしか考えられない事件の真相に、ローザの思考が行き着いたとき。

シャリイイイ……ン……。

唐突に、辺りに澄んだ金属音が響き渡った。

優乃が弾かれたように顔を上げた。振り返ったローザの正面から、強烈な光が照射される。思わず懐中電灯を取り落とし、眼前に腕をかがけて光の直射を遮りながら、ローザは目を凝らした。

部屋の入口の辺りに、眩い光を背に受けて数人の男たちが立っている。その姿はシルエットになっており、顔がよく見えない。

「そこまで知っているとは恐れ入る……確かにその吸血鬼に自我はない」

中心にいた男が一步前に進み出た。

「今では我々の意のままに動く、操り人形に過ぎん」

「そう……やっぱりアンタが裏にいたのね」

聞き覚えのある声に、ローザは眼前の腕を退け、眩しさに目を細めながらもニイツと唇の端を上げた。

「《光と闇の礎》大神官、自警団第一部隊長のワイアードさん？」

「ほお、私の名を知っているのですか」

ワイアードは一瞬意外そうな表情を見せたが、ローザの顔をまじまじと見つめると、

「成程、貴女はあのときの探偵さんですね。確か、ローゼンシルさん……でしたかな。名前を覚えておいて戴けたとは光栄ですよ」

余裕の笑みを浮かべて大袈裟に挨拶の礼をした。

「それにしても、二日足らずでここまで辿り着くとはね。賞賛に値しますよ、まったくたいしたものだ……それに」

ワイアードの視線が、ローザから優乃へと移動する。

「そちらのお嬢さんにも見覚えがありますな。貴女は確か、今まで幾度となく我々の邪魔をしてくれたお嬢さんではありませんでしたかな？」

「えっ……？」

「おや、ご存じではなかったのですかな？」

ローザの反応が予想外だったのか、ワイアードがやや驚いた様子で言う。

「そちらのお嬢さんは、ずっと吸血鬼を追っていたのですよ。事件の最初から、それこそ毎回のように現れては、奴と戦っていたのです。二日前の貴女のようにね。おかげで何度標的を仕留め損なったことか……もつとも、どういう事情があるのか、警察には連絡していないようですがね。貴女も憶えているでしょう？ 奴と戦った夜……」

吸血鬼と戦って、って……ユーノが？ 一人で？

得意げに話し続けるワイアードを無視して振り返り、ローザは見た。月の魅力満ちあふれる華奢な肢体をゆったりと構え、大勢の男たちを相手に怯むこともなく毅然と立つ、優乃の妖しくも美しい姿を。

彼女は静かな、落着いた目をしていた。栗色の瞳に照明の光が反射して、二つの月の如く輝いている。

「まったく、何処にあんな力が隠されているのやら想像もつきません」

「ワイアードさん……と仰いましたね」

突然、無視されているとも知らず延々と喋り続けていたワイアードの言葉を遮って、優乃が尋ねた。

「何故……このようなことを？ 魔性の者を操り、敬虔な信者を欺いてまで。善良な人々を殺めることに、何の意義があるというのです？」

「善良？ それは誰のことですか」

ワイアードは憤慨したように言った。

「貴女たちは何もわかっていない。いいですか？ 人とは無力な存在だ。だからこそ間違いを犯し、罪を重ねる。しかし神は偉大で全能だ。人は神にその身を委ねることで正しい道を歩むことができる。」



だが、口で言っただけではそれがわからない者もいる……いや、余りにも多過ぎる。神の御子たる誇りを失い、神を敬う心すらも忘れ果てた愚か者共……あまつさえ神を否定し、身のほど知らずにも己の自由や権利とやらを主張するような族がね！ だから我々は、より具体的に、よりわかり易い形で！ 人間が如何に無力な存在であるかということを、彼等に教えてやらねばならない！」

高らかな叫びと共に、ワイアードは錫杖を振り上げ、勢いよく床に打ちつけた。

シャリイイイ……ン……。

金属の環の擦れ合う音が、闇に吸い込まれるようにして消える。

「……そう……」

ゆらりと顔を上げ、ワイアードは再び薄笑いを浮かべた。

「その醜い化け物でも、神の教えを広めることができるということですよ……おっと、妙な真似はしないほうがいい」

何かに怯えたように、ワイアードが慌てて身体を翻す。それを合図に、彼の部下と思しき他の男たちが一斉に銃を構えた。

「如何に貴女とて、この数の銃の前ではどうにもなりませんよ。第三級とは言え、その吸血鬼を捕獲したのは我々教団なのですからね……さて、ローゼンシル嬢。おとなしく銃を捨ててもらいましうか」

いつでも銃を抜けるように用意していたローザの右手が、びくりと動きを止める。ローザは横目を使って優乃を見、ハッと目を見開いた。

静かな怒りが、そこにはあつた。表情を激しく変えることもなく、罵りの言葉を紡ぐこともなく。照り返しに隠れていた少女の瞳のその奥に、ただ静かに燃える炎が。

そっか……そういうことだったんだ。刹那の内に、ローザは悟った。それじゃあ、

「今ここで、あたし一人が勝手なことをするわけにはいかないよね……」

眩き、ローザは身構えを解いた。熱く燃えていた身体の芯が、静かに冷めてゆくのがわかる。ゆっくりと深呼吸をして呼吸を整えること、二度、三度。最後の一つを大きく吐ききると、ローザは優乃に向かって薄く微笑み、太股の内側から銃を抜いて床に置いた。ごとり。

金属の重く冷たい音が、暗闇の中に寂しく響く。

「ローザさん……」

優乃の瞳の奥に燃えていた炎が、戸惑いの風に吹き消される。ワイアードは少し考え込む様子を見せると、ローザの銃を取りに動いた部下の一人を片手で制した。

「それではもう一つ……今度は本物の銃も、出してもらいましょうか」

「ちえ……やっぱバレてたか」

やれやれと肩をすくめ、ローザは背負っていたリュックを下ろした。部下たちがざわめく中、ワイアードが一人、勝ち誇る。

「計算高い貴女のことだ。諦めたような言動で油断させておいて、我々の誰かがその偽物に手をかけた瞬間、本物の銃を突きつけて人質にでもするつもりだったのでしょうか……咄嗟のこととは言え、前に一度見せてしまったのは失敗でしたね」

「確かに、同じ手は二度と通用しないみたいね」

リュックの中に突っ込んでいた手を止めて、ローザは言った。

「でも、もしこれが同じ手じゃなかったら……どうなるのかしら？」

「何……？」

含みのある物言いに、ワイアードが訝しげに眉をひそめる。と、  
「動くなっ！」

鋭い叫びに、男たちがビクリと硬直した。リュックの中から白く塗られた缶を取り出して、ローザがニツと笑う。

「失敗だったわね、ワイアード大神官さん。その銃は確かに偽物……つまり、前にアンタに見せたライターよ。でも、それは単なる罠。コレが何だかわかるかしら？」

ローザは懷から本物の銃を抜き、銃口を白い缶に突きつけた。缶の上辺、ひよろりと伸びた黒い糸に目を止めて、ワイアードの顔がこわばる。

「導火線……！？ ……ふっ、見え透いた嘘はおよしなさい、ローゼンシル嬢」

どうにか表情を取り繕うと、ワイアードは諭すような口調で言った。

「貴女の周到な用意と機転の早さには感服しますが、この私とて、そう何度もだまされるものではありませんよ」

「そう？ そう思うのなら撃つてもいいわよ」

ローザは自信たっぷりに言い返した。

「でもそれだけの数の銃で撃たれたら、一発くらいはコレに当たっちゃうかもしれないわね。逆に一発くらい身体に食らったって、ただ引き金を引くだけだもの、全員巻き込んでやれるだけの自信があるわよ、あたしには」

「ローザさん！？」

「大丈夫よ、ユーノ」

批難混じりの叫びに余裕の笑顔を返して、ローザは言った。

「ここはあたしに任せて。……さて、一体どうするのかしら？ 大勢の部下の命を預かる身としては……ワイアード大神官様？」

「くっ……」

「往生際が悪いわね」

今度はローザは勝ち誇る番だった。

「アンタたちは所詮シロウトよ。戦鬪のプロじゃない。一発であたしを確実に殺すこともできないし、コレが本物かどうかを見抜くこともできない。当然、自分の命が犠牲になるかも知れない状況で引き金を引くこともね。たかが探偵ごときの一喝に驚いて、みすみす切り札を出させたのがいい証拠だわ。見つけてすぐにあたしたちを殺さなかった時点で、アンタたちは負けてたのよ……さあ、道を開けなさい！」

缶に銃口を突きつけたまま、一步前に進み出る。

しばしの間、誰もが無言だった。ワイアードは怒りと屈辱に全身を震わせ、銃を携えた男たちは、ローザと上司の動向を固唾を呑んで見守っている。やがて、

「……いいでしょう」

しゃがれた声を喉の奥から絞り出し、ワイアードは部下たちを退かせると、憎々しげに言った。

「窮鼠猫を噛む、とはよく言ったものです」

「あら、あたしたちは鼠なワケ？ 随分とまた可愛らしい鼠よねえ」  
「減らず口は結構。通るのならばさっさとお通りなさい……しかし、ここを出たところでどうするおつもりですか？ 満足な証拠もなく騒いだところで、事態が変わるとは思えませんが」

「そんなこと、やってみなければわかんないわよ……行くよ、ユー」

油断なく男たちを見据えながら、ローザは歩き出した。

「あつ、待って下さい、ローザさん」

床のライターと懐中電灯を拾い、優乃がローザの後を慌てて追いかける。二人はゆつくりと歩みを進め、ワイアードの脇を通り過ぎ……立ち尽くす男たちの中程にさしかかったところで、

「そうそう、ワイアード大神官さん。一つ言い忘れてたことがあったわ」

「……何ですか？」

「やーね、そんなに身構えないでよ」

缶を手のひらの上で転がしながら、ローザは笑った。

「あたしはさあ、別に神様を信じてないワケでも、身のほどをわきまえてないワケでもないわよ。ただね、アンタみたいに『自分が一番正しいんです』って顔してすましてる奴が、いーいっちゃん嫌いなだけよ！」

言い終わるか否かの狭間に、引き金にかけた指に力を込める。

「なっ……よ、よせっ！」

突然のことに慌てふためき、ワイアードがローザの手から缶を奪い取ろうとした、その瞬間。

ドンッ！

「うおっ！？　ぐ……ゴホッ、ゴホッ！　な、何だ、これはっ！？」

銃弾に撃ち抜かれ破裂した缶の中から、白煙が凄まじい勢いで吹き出した！　突然視界を遮られて転倒し、激しく咳き込むワイアード。煙は瞬く間に部屋いっぱいになり、照明の光を反射して、暗闇を白く塗り変えてゆく。

「けけけ、こ、これは……きゃっ！？」

「ユーノ、行くよ！」

ローザは優乃の手をつかむと、煙を振り切って一気に隠し部屋を飛び出した。通路に立っていた照明を振り向き様に撃ち壊す一方で、優乃が機転を利かせて書棚の仕掛けを作動させ、出入口を塞ぐ。

「見た！？　あたしの秘密兵器！」

書斎を抜け、廊下を全力疾走しながら、ローザは得意げに言った。  
「あーゆうのって昔から得意なのよ！　女らしくないってよく言われたけどね！」

「そんなこと……けほっ、ないです！　カッコイイですっ！　さっきのかけ引きなんか、けほっ、見ててドキドキしちゃいました！」

冷めやらぬ興奮に頬を紅潮させて優乃が叫ぶ。

「確かもう一つありましたよね、秘密兵器！　次は何が起こるのかワクワクします！」

ローザは振り返り、悪戯っぽく笑った。

「余裕あるじゃない！」

「ふふっ、ローザさんこそ！」

「言ったでしょ？　あたしには可愛げのない幸運の女神がついてるってさ！」

例の可愛げのない身代わり人形を、ポケットから取り出して見せる。と、まじまじと人形を見つめる優乃の顔が、みるみる内にパアツと明るくなった。

「……かつ……」

「か？」

「かつわいいっ！」

「……へっ？」

呆気にとられるローザをよそに、優乃は瞳をキラキラと輝かせ、頬擦りしそうな勢いで身代わり人形を握り締めた。

「これ、何処に売ってたんですか！？ まだありました！？」

「……いや、あの……まだあった……と思うけど」

どこが可愛いのか、それ。続く言葉を飲み込んで、ローザは、言った。

「ユーノ……欲しいんだったら、それあげよっか？」

「ホントですかっ！？ 嬉しいですよ！ 私、可愛いものを集めるのが大好きなんです！ 家に帰ったら、すぐに部屋に飾りますね！」

「そ、そう……」

どんな部屋なんだろう、一体……。

「後はですね、サングラスとか日傘とか、お洋服とかも集めてて、この間のはその一部なんですけど、その他にも……」

「そ、そう……あのさあユーノ、嬉しいのはわかったから、今はとりあえずしまつといてくれない？」

ユーノの家に行くときは、かなりの覚悟がいりそうね……。

楽しげに喋り続ける優乃を苦笑混じりに見つめながら、しかしローザは、一刻も早くそんな平和な未来が訪れることを願った。

実際、そう遠くない未来、ローザが優乃の屋敷を訪ねるときには相当な覚悟が必要になるのだが……それはまた、別の物語である。

「おのれ小娘が、ふざけた真似を……！」

床に這いつくばりながら、ワイアードはギリギリと歯噛みした。

騙された。一度ならず二度までも。あの探偵は我々ばかりか仲間さえも欺き、ありもしない爆弾を持っている振りをした。そうして我々を散々脅迫して道を開けさせた揚げ句に、追撃さえ不可能な状

況にまで追い込んで、まんまと逃げおおせてしまったのだ！

文字通りの完全な敗北に。生涯最大の屈辱に。ワイアードのきつく握り締めた拳から血が流れ、床に赤黒い染み跡を残した。

「ワイアード様、ご無事ですか！？」

「……邪魔だ……」

「えっ？」

「邪魔だと言っている」

差し出された部下の手を振り払い、ワイアードは錫杖を手がかりに立ち上がった。

「どうしましょう、奴等通路を塞いで……」

「このままでは逃げられてしまいます！ それにもし、今ここに警察を呼ばれたら！」

「うるたえるな。切り札はこちらにある。お前たちは通路から離れているのだ」

不気味なほどに冷静に、ざわめく部下たちに指示をする。ワイアードは出入口には向かわず、部屋の中央の台座に両手をついた。男を縛りつけている拘束具を外し、呪符を次々と剥ぎ取ってゆく。

「奴等は後悔するのだ、神の教えに背きし自らの罪深さを……さあ縛るものの何一つなくなった吸血鬼の胸に手を当てて、ワイアードは、強く念じた。

「目覚めるがいい」

ドクンッ！

「……………っ！」

血が逆流するような衝撃が、優乃の全身を駆け抜けた。

「何？ どうしたの、ユーノ？」

異変に気づき、隣を走りながら尋ねるローザ。優乃は服の上から心臓を鷲づかみにし、確信に満ちた声で呟いた。

「……来ます……」

「来ますって、何が……まさか」

ハッと振り向いた瞬間、書斎の扉を突き破り、一人の男が廊下に飛び出してきた。黒いコートが翻り、青ざめた肌の痩せぎすな身体が覗く。

……吸血鬼！

ローザの脳裏に、先日之死闘が甦った。

背中をえぐった鋭い爪。

喉に食らいついた牙。

大きくはためく翼……翼？

ローザは思わず目を擦った。幻覚ではない。一對の大きな翼が……コウモリのものに酷似した漆黒の翼が、男の背から突き出している！ 数秒とたたずに完璧な姿形を得た翼は、男の尋常でない勢いを更に加速し、二人との差をグングンと縮めてくる。

ローザは全身総毛立った。これ以上近づけてはいけない。無意識下の警告に衝き動かされた腕が銃を構え、男に向けて発砲する。ギヤアツと悲鳴。鮮血が男の胸から迸る。当たった！ 思わず浮かべた笑顔は、しかしそのまま凍りついた。男の勢いは止まらない。無論死んでもいない。何故なら相手は、不死身の怪物なのだ……！

ガアアアアアアアアツ！

「ちいつ、やっぱ一発じゃ無理か……！」

覚悟を決めて立ち止まり、正確に狙いを定めて撃とうとした、そのとき。

「逃げて下さい、ローザさん！」

「ユーノ！？ ……あ、危ない！」

突然間に割って入った優乃を突き飛ばしたのと、ローザと男との距離が零になったのが同時だった。いっばいに開かれたローザの翠の瞳に、男の殺気だった瞳が映り込む。

次の瞬間、凄まじい勢いでつかみかかられたローザは、廊下の奥の礼拝堂への扉を突き破り、その先にあつた回廊の柵をも吹っ飛ばして、男と共に何もない空間へと飛び出した。



教会の中央に位置する礼拝堂には、百人を越える数の人々が集まっていた。

一日の終わりを神に感謝し、また明日も太陽が上ることを願う、夜の礼拝。人々は一様に黙祷を捧げ、壇の奥に備えつけられた巨大なパイプオルガンだけが、荘厳なレクイエムを奏でている。

壇上に立つ者の姿はない。一日の内で夜の礼拝だけは、きらびやかな服装の神官、粗末な管筒衣姿の信者に混じって、普段着のまま祈りを捧げている者の姿も見られる。彼等は入団者ではない。仕事帰りの者や家事の暇を縫って集まった主婦など、多くの時間や多額の寄付を教団に捧げられるほどの余裕がない人々だ。

曲の一節が終わる度に、既に充分に祈りを捧げた人々が、他の人々の妨げにならぬよう静かに礼拝堂を去り、各々の帰路についてゆく。一方で、新たに訪れた参拝者が、思い思いの場所を見つけてひざまずく。この営みが、最後の一人がいなくなるまで続くのだ。それは今夜も変わることなく、いつも通りに行われるはずだった。だが。

礼拝堂を支配していた沈黙を突如として破った轟音に、人々は驚き顔を上げ、そして見た。遙か四階の高さから降りそそぐ数々の木片を……そして、宙を舞う異形の者の姿を。

ローザは男の顎に手をかけて、必死に身を守っていた。相手も飛びながらの攻撃はしにくいらしいが、それでもつかまれている部分が痺れるほどの凄まじい握力でローザの肩口を握り締め、鋭い牙で執拗に喉を狙ってくる。

つかんでいる手を放せば、遙か地上に落下したローザが無事ではすまないことは、男の頭の中にはないらしい。だがこのままでは身体が落ちるまでもなく、男の牙にかかって命そのものを落とすこと

になりかねない。扉を突き破ったときに何処かが切れたのだろう、ズキズキと痛む頭でどうにかこの危機を脱する方法を考えていたとき、不意に男が慌てたように顔を上げた。

「しめた！」

一瞬の間を見逃さず、ローザは銃口を男の顎に突きつけて引き金を引いた。

ドンッ！

鈍い衝撃と共に顎が砕け、頭の上半分が吹き飛んだ。がっちりと肩口を握り締めていた手が握力を失いローザを放す。一瞬の浮遊感の最中に左手に何かが目に入り、咄嗟に銃を放してつかんだそこは巨大なパイプの切口だった。男が攻撃に気を取られている間に、二人は礼拝堂正面のパイプオルガンに突っ込むように飛んでいたのだ。ローザがかろうじて落下を免れた一方で、そのままオルガンに激突した男が弾き返されて宙を舞い、壇の上に落ちる。

腕一本でぶら下がり、突然降ってきた異形の怪物に驚き騒ぐ人々を見下ろしながら、ローザは荒々しく息をついていたが、不意に左肩に走った激痛に顔をしかめた。どうやらパイプにつかまったときの衝撃で痛めたらしい。右手をそろそろと上げて手がかりを捜し、どうにか這い上がるかと試みる。

……と。

一階で騒いでいた人々の気配が、にわかに恐怖と混乱の様相を示した。ローザはハッと視線を下ろし、

「やばい……！」

急いでパイプの上に這い上がった。

オルガンを伝って回廊に渡ろうとするローザの遥か下方で、うつ伏せに倒れていた男の翼が、力強く、バサリとはばたく。

「私は非暴力主義者でね」

血走った眼を狂気と正気のはざまに揺らしながら、ワイアードはうつすらと微笑んだ。

「できることなら手荒な真似はしたくないのだよ。特に、君のように可愛らしいお嬢さんにはね」

「他の方々は、そうでもないようですが」

優乃は衣服の乱れを整えると、銃を構えて周囲を取り巻く男たちを一瞥した。

「これが暴力ではない、と……そう仰るのですか？」

「我々の非は認めよう。だが、争いを未然に防ぐ方法としては仕方のないことなのだ。世の中には君の仲間のように、無益な争いを好む者も多い……君は、どうなのだね？」

「私は、それが誰であろうとも、争うことを好みはしません」

ワイアードは優乃の答えに満足げにうなずくと、部下たちに命じて銃を下ろさせた。

あの吸血鬼に立ち向かおうとしてローザに突き飛ばされた、少し後。二人を追って礼拝堂に向かおうとしたところで、優乃はワイアード率いる男たちに取り囲まれていた。

「好みはしませんか……」

優乃はポケットからサングラスを取り出すと、

「仲間、ですか……いい言葉ですね」

感慨深げに呟きながら、それをかけた。

「そう、あの人は、こんな私を信じてくれたのです。そして自分の危険もかえりみずに、私を助けようとしてくれた……だから私も、あの人を助けなければなりません。たとえそれによって、恐れられるようなことになったとしても……」

漆黒の翼を大きくはばたかせ、男は空中高く舞い上がった。すぐ近くで腰を抜かしているオルガン奏者や、壇の下にいる大勢の信者たちには見向きもせず、まっすぐにローザに向かって突っ込んでくる。

ローザは慌てて三階の回廊に跳び移った。その背後で、ついさっきまでローザがいた場所に男が激しく衝突する。ローザは銃を構え

ようとして、手元がないことに気がついた。先程パイプにつかまったときに、下に落としてしまったのだ！

愕然とするローザ、その一方で、男が又も何事もなかったかのようになり上がる。ギクリと振り向いた視線の先で、男は翼を広げ、ローザを睨みつけた。

ローザの背筋を冷たいものが走った。たまらず駆け出し、逃げ込んだ回廊脇の暗い廊下のその先は、何と行き止まり。

「……………」

冷たい壁に拳を打ちつけ、ローザはその場に膝をついた。

「一つ、忠告しておこう」

ワイアードは顔から表情を消すと、再び銃を構えようとした部下たちを制し、抑揚のない声で言った。

「人形使いもそうだが……何かを操ろうとする者には、操る対象に見合っただけの知識と技術が要求される。君は私が、あの《第三級吸血鬼》よりも弱いとも思っているのではないかな？　だとすれば、それは大きな間違いだ」

懷から呪符の束を取り出し、片手に四枚ずつ、カードマジックでもするような手つきで指の間に挟み持つ。すると残りの呪符はひとりでに宙を舞い、優乃の周囲を取り囲んだ。

「……呪符魔術……ですか」

優乃はサングラスの縁を指で挟み、ゆっくりと上にずらした。

ダークグレーの色硝子の下から現れた栗色の瞳には、魔性の月の輝きがあった。

形のよい薄紅色の唇が、にっこりと微笑む……。

背後ではばたきの音がした。続いて壁や天井に何度もぶつかりながら、無理やり追ってくる音。思わず振り向いた視界の端に、壁にぽっかりと開いた虚ろな空間が映る。

……………階段！

なりふりかまわず階段に跳び込んだ瞬間、背中のリュックが斬り裂かれた。男はそのまま正面の壁に激突し、ローザはリュックの中身をぶちまけながら、階段を二階に向かって転げ落ちる。廊下に投げ出され壁にぶつかって止まると、ローザは低く呻き、身体を開いて、その場に大の字になって寝転んだ。

汗にまみれた衣服が、べつとりと全身に張りついている。肺は今にも破裂しそうだ。身体中が心臓になったような錯覚に、何処に傷があるのかわかりもしない。

……と。

上の階から、低い呻き声が聞こえてきた。

「まったく……少しは休ませて欲しいわね……っ」

痛めた左肩を右手で押さえながら、ローザはヨロヨロと立ち上がった。周囲に散らばった荷物の中に赤く塗られた缶を見つけ、わずかに表情を和ませる。

「いちかばちか……これが最後の切り札よ」

自らに言い聞かせるように呟くと、ローザは赤い缶をつかんでポケットに突っ込み、一階を目指して走り出した。

全身から血を流しながら駆け込んできたローザの姿に、多くの人々は更なる恐慌に陥った。我先に逃げ出そうとする者と、騒ぎを聞きつけて駆けつけてきた者とがぶつかり合って、たちまち各所で混乱が始まる。

人込みを掻き分け、行く手を阻もうとする者は有無を言わず殴り倒して、ローザは壇上に駆け上がった。腰を抜かして座り込んでいるオルガン奏者の手前に、銀色の塊が落ちている。

銃だ！

思わず微笑んだローザの背筋を、不意にゾツと冷たいものが走った。咄嗟にもんどり打って逃れるローザのすぐ脇を、翼持つ異形の影が通過する。影はパイプオルガンの手前で宙高く旋回し、銃の近くに舞い降りる。オルガン奏者はなさけない悲鳴を上げて、這うよ

うにして逃げ出した。

礼拝堂は沈黙に包まれた。

多くの人々が逃げ出すことも忘れて見守る中、男はよつんばいの態勢になり、床で爪を研ぎながら、じりじりと間合いを詰めてくる。鋭い牙の覗く口から、赤いものの混じったよだれが滴り落ちる。

威圧感と言うべきか、それとも圧迫感と言うべきか……男を取り巻く禍々しい気配が薄れていることに、ローザは気づいていた。

動きも若干鈍くなっている。元から青ざめていた肌は更に血の気を失い土気色になっており、もはや生者のものとは思えない。度重なる再生は、やはり身体への負担が大きいのだろうか。

……こんなになってまで。

緊迫した時間の流れの中で、ローザの心の内に、ふと男に対する哀れみが生じた。

こいつが元はどんな奴で、何をしていたのかはわからない。もしかしたら人を襲っていたかも知れないし、血を吸っていたかも知れない。だがもし、それがこいつの背負った宿命であり生きる術であるのなら、自分やあの警官は、人間の誇りと尊厳をかけて戦っただろう。

しかし今のこいつは自らの意志とは無関係に、一部の人間の身勝手な欲求を満たすために利用され、殺戮を繰り返すように仕向けられている。

くだらないな……ローザは思った。どうして人間というものは《力》や《数》に固執するのだろう。確固たる信念を持つのはいい、だがどうしてそれを他人にまで押しつけようとするのか。本当に大切なものは十人十色、一人一人の心の中にこそあるはずだ……少なくてともローザは、自らの心の中の《大切なもの》を捜し求めて、このウィンストリアにやってきたのだ。

グルウアアアアアアッ！

天地も裂けんばかりの咆哮を上げ、男が飛びかかってくる。ローザは踏み込みながら身体を沈め、ポケットの中でずつつかんでい

た赤い缶を力一杯投げつけた。男の鋭い爪が缶を斬り裂く、中からあふれ出した液体がたちまちの内に炎上する、炎が男の全身を包み込む。燃え盛る火球となった男はローザの頭上を越えて壇の上から転げ落ち、ローザは銃を拾い上げ、懷に納めた。だが。

振り返り、歩き出そうとしたローザの行く先で、またしても男が立ち上がる。今尚燃え続けるコートの残骸を身にまとい、全身の皮膚が真つ赤に焼け爛れ崩れた痛々しい姿をさらけ出して。壇上へと続く階を、一步一步、上ってくる。

「……もう……」

やめよう。

言いかけて、ローザはハッと口を閉じた。

男の瞳のその奥に、確かな感情の光が宿っている。

それは己の運命を弄ばれたことへの怒りでもなく、人々に恐れられ蔑まれることへの悲しみでもなく。

ただ、はつきりと、憎悪。

「……人にあらざる者、闇に住まう者よ」

男の瞳をまっすぐに覗き込み、ローザは、静かに言った。

「この先の闘いは、我々二人の闘いに他ならない。そなた自身の尊厳と誇りにかけて、全身全霊をもって挑まれよ」

階を上り終え、男が歩みを止めた。

二度の闘いを経て今一度、二人が壇上で対峙する。

「我が名はローゼンシル・レクター……そなたに永久の眠りを与えんとする者である」

ローザが言い終えると同時に、男は稲妻のような速さで突撃してきた。

ローザは懷から銃を抜いた。銃を支え持つ五本の指に、手のひらに、全ての願いと祈りを託し……ローザの意志に反応した《吸血鬼退治の銃》が、淡く美しい輝きに包まれる。大きく翻るコートの残骸、その下から現れた男の焼け爛れた上半身、刻々と脈打つ心臓に

狙いを定めて、ローザは、迷うことなく引き金を引いた。

輝きは収束し、凝縮し、そして弾け飛んだ。

次の瞬間、銀色の閃光が迸り、男の心臓を貫いていた。

男の瞳が驚愕に開かれ、次いで、自らを滅ぼした者へと向けられる。

二人の視線が交わった。

一点の曇りもない澄んだ瞳に見つめられて、ローザが少し当惑した表情を見せると、男は、フツ、と微笑んだ。

寂しげに。

悔しげに。

羨むように。

振り降ろされた男の爪が、ローザの身体を斬り裂く直前、灰となつて崩れ去る。瞬く間に無垢なる灰となった男の身体は、ローザの身体を突き抜け、背後へと流れ、そして、消えていった。

ローザはしばらくの間、その場にじっと立ち尽くしていた。やがて、ゆつくりと、銃を納める。手のひらにわずかに残った灰を握り締め、ローザは、大きく息を吸い込み、長々と吐ききった。

……そこへ。

「誰かワイアード様に報告しろ！　いいか貴様、逃げられると思うなよ……！」

今更ながら駆けつけてきた神官たちが、ローザを取り囲んで銃を構えた。

ローザは腹立たしげに神官たちを一瞥したが、抵抗はしなかった。最早彼等と一戦交える体力も、銃を抜く気力さえも残ってはいないのだ。

礼拝堂に残っていた数十人の信者たちは、目の前で立て続けに起こる出来事に何が何やらわからず、異形のことを退治した勇敢な娘と敬うべき神官たちとを見比べるばかり。神官たちでさえ、とりあえず包囲はしたものの相手に抵抗の様子がなく、この先どう



すればいいのかを指示する者もなく、気まずそうに互いの顔を見合わせている。

そのとき。

礼拝堂に張り詰めていた緊迫した空気の何処かが、ざわり、と揺れた。誰かが顔を上げ、誰かが何かを指さして、たちまち口々に騒ぎ始める。

ローザが、神官たちが顔を向けたその先には、一人の男の姿があった。

「ワ……ワイアード大神官様！」

数人の信者が慌てて駆け寄る中、二階から壁伝いに続く階段を駆け落ちてきたワイアードは、錫杖を支えに立ち上がったかと思うと、

「き、吸血鬼だ……吸血鬼が来るぞ……！」

不吉な言葉を言い残して、力尽きたように倒れた。

……と。

突然、辺り一帯に濃密な花の香りが立ち籠めた。意識を失ったかと思えたワイアードがギクリと顔をこわばらせ、絶対的な恐怖に彩られたまなざしを、自らが落ちてきた階段の上へと向ける。

「き……来た……」

ワイアードが震える声で呟いた、次の瞬間。

礼拝堂へと続く通路という通路から、赤紫色の激流が、凄まじい勢いで流れ込んできた。

それは鮮やかな赤紫に染め抜かれた白薔薇の、無数の花びらの奔流だった。まるで意志があるかの如く礼拝堂の中空を旋回していたかと思うと、獲物を狙う禽の群れのように人々を次々と巻き込んでゆく。

「う……うおおおおおっ！」

ワイアードは血走った眼をカツと見開くと、懷から呪符の束をつかみ取って己が周囲に撒き散らした。主の命を受けた呪符はたちまちの内に宙を舞い、堅固な結界となつて赤紫色の激流を阻む。

彼のように身を守る術を持たず、襲い来る激流に飲み込まれた人々は、為す術もなく倒れて動かなくなつた。最初の流れからかうじて逃れた者も、礼拝堂からの脱出を試みる間もなく別の流れに飲み込まれてしまう。そんな中、ローザは一切の被害を受けずに立っていた。

「凄いわね……」

呟き、渦巻く花吹雪の向こう側に、ふと目を凝らす。

ワイアードが先程落ちてきた壁伝いに二階へと続く階段の上に、大きな鞆を手にして立つ一人の少女の姿がある。

やがて礼拝堂にローザとワイアード以外に立つ者がなくなると、赤紫色の激流は再び中空を旋回し始めた。そのまま徐々に収束し、ただ一点に吸い込まれてゆく。無数の花びらをすべて吸い込み、バタンと大きな音をたてて、少女の持つ鞆の蓋が閉じた。

遠目ではつきりとは確認できないが、それでも確信に満ちた口調で、ローザは呟いた。

「ユーノ……」

と。

優乃はゆっくりと階段を下りてきた。

ローザもまた壇を下りた。そのまま優乃に歩み寄ろうとして、ワイアードの鋭い叫びに阻まれる。

「近づくのではない！ この者は……この者は、《第一級吸血鬼》だ！」

「《第一級吸血鬼》……？」

聞き慣れない言葉に眉をひそめ、ローザは優乃に視線を移した。

未だかつて感じたこともないほどの魔性の波動が、少女の全身から放出されている。元から色白だった肌は白を通り越して蒼白になり、瞳孔が完全に開ききった瞳は、いつもの栗色ではない、その奥に奈落の深淵を映し出している。バンダナの合間からはみ出した髪がふわりと揺れ、衣服の端がはたと鳴った。少しの風も、ないのに。

そこに殺気はなかった。かつて見た強い意志の光も、静かに燃える怒りの炎も。憎悪ですら、一片の介入も許されてはいなかった。

ただ、悲しみが。

途方もない悲しみだけが。

「うっ！ ……ああ……っ！」

何の前触れもなく、ワイアードの身体が金縛りにあったように硬直する。恐怖に顔を引き吊らせ、為す術もなく立ち尽くすワイアードに、優乃は静かに歩み寄った。

無造作に動かされた手が、今尚存在する呪符の結界に触れる。瞬間、結界の表面が激しく火花を散らし、優乃の手を弾き返す幻をローザは見た。あるいは結界を構成するすべての呪符が、跡形もなく消滅する幻を。

だが現実には、そのどちらでもなかった。

少女のほっそりとした指先は、何の抵抗もなく界面をすり抜けていた。薔薇の奔流を退けた呪符の結界も、優乃自身の魔性の波動の前では何の効果も発揮しなかった……いや、作用すらしなかったのだ。どんなに頑丈な金網であろうとも、流れる霧を阻むことはできぬように。

優乃の手首が、腕が、そして肩が、音もなく界面をすり抜けてゆく。まっすぐに伸ばした指先が眉間に触れた途端、ビクンと全身を痙攣させ、ワイアードは倒れた。周囲に舞っていた呪符の数々が急速に力を失い、はらはらと床に落ちる。

辺りは急に静かになった。

優乃の瞳にスウツと光が戻る。

「ご無事ですか、ローザさん……ローザさん？」

間近からかけられる言葉を、ローザは音ではなく、肌の振動として感じ取っていた。視界に霞がかかり、ひどく息苦しい。全身から汗が吹き出し、まるで身体中の血液が沸騰して逆流しているかのようだ。

異変に気づいた優乃が慌てて駆け寄ってくる、その腕に抱き止められる直前、ローザの意識は闇に溶けた。

次に目が覚めたとき、ローザは見知らぬ部屋の中にいた。

天井は高く、巨大なシャンデリアが吊ってある。床には絨毯が敷かれており、現在自分が寝かしつけられているベッドを除けば、家具の類は小さな丸テーブルと二人掛けのソファが一つ。

枕元に燭台が一つあるが、天井のシャンデリアと同様に火は灯っておらず、辺りは暗い。それでもかろうじて周囲の様子がわかるのは、開け放たれたままの大きな窓の外に、冷たく輝く月があるからだ。どうやら自分は、そう長い間意識を失っていたわけではないらしい。もっとも、あれから丸一日以上が過ぎたのでなければ、の話だ。

額の上に、ひんやりとした感触がある。そつと動かした手につかみ取ったそれは、氷の溶けかかった氷嚢だ。冷たい感触を手の中で弄んでいる内に、ぼんやりしていた意識がはつきりしてくる。

ローザはもう一度視線を巡らせ、そのとき初めて、ベッドのすぐ脇に一人の男が控えていることに気がついた。

「お気づきになりましたか」

真面目そうな声の持ち主は、ハツとするほどに整った容姿をしていた。遅しくも引き締まった身体、涼しげな瞳。生まれつきなのか、短く切り揃えられた髪は一本残らず白髪だが、見た目は二十歳過ぎの青年だ。肌の色は浅黒く、何処か野ざらしの岩を思わせる。だがそれは決して冷たい印象ではなく、むしろ彼の精悍な顔つきを際立たせている。

「貴方は……？」

「私の名はトーマス・ベント。優乃お嬢様の身のお世話をさせていただいている者です」

「……そうだ、ユーノ！」

跳ねるようにして起き上がり、たちまち激しい目まいを起こして、ローザはベッドに倒れ込んだ。

「無理をしてはいけません」

トーマスと名乗った青年の、大きくがっしりとした手が、薄地の毛布の上からローザの胸を押し留める。ローザは一瞬びくりとしたが、不思議と不快感はなかった。しばらく呼吸が整うのを待ち、視線だけ動かして、男の顔を見つめる。

「貴方、トーマスさんって言ったわね……あたしの身体、どうなったの？」

「ご心配には及びません。優乃お嬢様の発せられた魔気の急激な高まりが、貴女の体内を流れる服従の血を刺激したでしょう。そしてそれを、貴女自身の血が抑え込もうとして衝突したのです」

「服従の血……？ ……あっ」

唐突に、ローザは思い出し、喉の傷痕に手をやった。

そうだ、あたしは一度、吸血鬼に噛まれてるんだっけ。それから何だか、身体が凄く熱くなって……。

「……それって、あたしが吸血鬼になったっていうこと？」

おずおずと尋ねると、トーマスはわずかに目を細めた。どうやら微笑んだらしい。

「思い当たるところがあるようですね。しかし、貴女は正真正銘、

今も間違いない人間ですよ。それに服従の血と言っても、貴女の体内に流れているのはほんの微量……覚えていらっしゃいますか？

二日前の夜、あの哀れな男との戦いの後に、優乃お嬢様とお会いになったことを」

「ええ。確か……」

そっか、あのときは馬車があつたから、トーマスさんもいたんだよね……。

言われるままに記憶を辿り、そのとき何があつたのかを思い出して、ローザは思わず頬を赤らめた。そんなローザの様子には留意せず、トーマスが話を続ける。

「あのとき、自覚はなかつたでしょうが、貴女は大変危険な状態にありました。ご存じでしょうか、吸血鬼の誕生には二通りの方法があります。一つは人間と同様、異性間の交わりによって生まれるもの。そしてもう一つが、世間一般に言われているところの『吸血鬼に血を吸われた者は吸血鬼になる』というものです。しかし正確には、吸血鬼に血を吸われたからといって吸血鬼になるわけではありません」

「えっ……？」

「本当の原因は唾液……吸血行為の際に体内に流れ込む唾液こそが、人間を吸血鬼へと変化させる最初の因子なのです。優乃お嬢様にお会いになったとき、貴女は既に吸血鬼化の過程にありました」

絶句するローザの胸の上から手を退け、トーマスは立ち上がった。開け放してあつた大窓を閉じ、レースのカーテンを引く。部屋の中は一段と暗くなったが、それでも闇に馴れた目には十分な光量がある。

「確認の為に尋ねしますが……優乃お嬢様が、あの哀れな男と同じ吸血鬼であることは、既にご存じですね？」

「え？ ……あ、うん……そうね、何となくだけど気づいてたわ。」

ワイアードの奴は、ユーノのことを第一級、あの男のことは第三級とか言ってたけど」

「成程……では、その分類に従ってお話ししましょう」

トーマスは再びベッドの横の椅子に腰を下ろした。

「今、私は優乃お嬢様とあの男が同じ吸血鬼であると言いましたが、厳密に言って、二人の間には大きな違いがあります。一口に吸血鬼と言っても、そこには大きく分けて三つの種類が存在するのです。」

一つには、《第一級吸血鬼》と呼ばれる、吸血鬼の頂点に立つ存在。そのすべてが始祖の血を受け継ぐ者で、他のものとは比較にならない強大な魔力と、数多くの特殊能力を生まれながらに有しています。寿命は……あるのかも知れませんが、私の知る限り、未だかつて天寿を全うした者は一人として存在しません。優乃お嬢様は《第一級吸血鬼》としては最も年若く、これの末席に座しているといえます。」

次に《第三級吸血鬼》ですが、これは吸血鬼の中で最も下位の存在です。誕生の方法は三通り、後から説明する《第二級吸血鬼》の唾液によるもの、《第三級吸血鬼》の唾液によるもの、そして《第三級吸血鬼》が異性と交わることによって生まれるもの。魔力は低く、特殊能力も、再生や飛翔などしか備わっていません。異性間の交わりによって生まれたものに限っては、例外的に人間として誕生し、ある時期を境に《第三級吸血鬼》として覚醒しますが……どちらにしても元々は普通の人間である上に、自らの意思とは無関係に作用する再生能力に生命力を著しく削られるため、多くの場合、短命です」

「……………」

ローザはギュッと手を握り締めた。思わず脳裏に浮かんできたあの男の土気色の顔を、頭を振って追い払う。

トーマスはローザの様子に気づき、少しの間黙っていたが、

「あ……ごめんなさい、続けて」

「では……最後に《第二級吸血鬼》ですが、これを説明するには、まず服従の血について知っていただく必要があります」

話の続きを促されて、再びゆっくりと喋り始めた。

「俗説では、吸血鬼に血を吸われながらも生き残った者は、その吸血鬼の奴隷となりますね。現実には《第一級吸血鬼》の場合にのみあてはまるこれが、つまり服従の血……《第一級吸血鬼》の唾液だけが人体に及ぼす影響です。しかし逆に、《第一級吸血鬼》の場合に限り、唾液を受けた者はこの時点では吸血鬼になっていません。魔気に対する感知能力と強い耐性を得てはいますが、れっきとした人間のままなのです……そう、今の貴女と同じように」

「成程ね……話が読めてきたわ」

ローザは内心ひどく動揺していたが、努めて冷静な口調で言った。  
「つまりあたしは、あの吸血鬼に噛まれたことにより、《第三級吸血鬼》へと変化しつつあった。そのことに気がついたユーノは、あたしの体内に入り込んだ唾液を可能な限り吸い取り、更に自分の唾液を送り込んだ。同じ方法を用いれば、より上位である《第一級吸血鬼》のほうが勝るのは当然のこと……結果、あたしを人間として留めることに成功した。言ってみれば、毒をもって毒を制したってワケね……それで？」

「これを……お嬢様から預かっています」

トーマスは足元から手作りと思われる皮製のリュックを持ち上げ、懷から赤紫色の液体が入った硝子壺を取り出し、それぞれローザの手に握らせた。

「？ これは……？」

「《第一級吸血鬼》に次ぐ強大な魔力と数多くの特殊能力、そして人間よりも遥かに長い寿命を持つ《第二級吸血鬼》……その誕生の方法は二通りです。一つは《第二級吸血鬼》が異性と交わること……そしてもう一つは」

トーマスは一旦言葉を切り、ローザをじっと見つめ、また口を開いた。

「貴女のように服従の血の流れる者が、自らの主たる《第一級吸血鬼》の血を飲むこと……その瞬間、体内の服従の血は消滅し、《第二級吸血鬼》として覚醒します」



……少し後。

暗い部屋の中で唯一人、上体を起こしてベッドに座るローザの手元には、赤紫色の液体が入った硝子壺と、そして手紙らしきものがあつた。

既に解かれてはいるが、封筒には略式ながら封の施されていた形跡がある。便箋に残る折り跡は、少しの狂いもなく四つ折りにされていたことを物語っている。送り主は几帳面な性格なのだろう。

枕元の燭台には赤々と燃える蠟燭がある。薄闇に揺れる小さな炎が、流れるように便箋にしたためられた文字を克明に照らし出し、その文面を明らかにしていた。

親愛なるローザさんへ

貴女がこれを読んでいる頃には、貴女の身に何が起きたのか、トーマスに聞いて知っていることと思います。本来ならば私の口から説明すべきことなのでしょうが、私には貴女に会わせる顔も、その勇氣ありません。

できることなら、貴女には何も知って欲しくありませんでした。何も知らずに、普通の人間として生きてもらいたかった。でも、何も知らないまま、何もわからないままにいるなんて、貴女はきつと納得しないでしょう。ですからトーマスに頼みました。ローザさんの問いに、可能な限り答えるように、と。

しかし、トーマスとてすべてを知っているわけではありません。彼はこの館の執事であり、また私の養い親でもあります。吸血鬼ではないのです。彼が自分のことを貴女に話したかどうかはわからない以上、ここに詳しく彼のことを書くわけにはいきませんが……ともかく、彼の知らない事柄を含む、すべての真相をここに記します。

貴女もご存じの通り、この事件の一人目の犠牲者が出たのは数週間前のこと。しかし事件そのものは、一ヶ月以上も前から始まっていたのです。

生来吸血鬼には、魔気に対する優れた感知能力が備わっています。貴女自身、既にその身をもって体験されたことと思いますが、特に我々……あのワイアードという方の言い方を借りるのならば《第一級吸血鬼》の感知能力は突出しており、《第三級吸血鬼》レベルの魔気であれば、ほぼウィンストリアの全域、何処にいても感知することができのです。ですから勿論、彼がこの地にやってきたとき、私はすぐに気がつきました。そして、この地に住む唯一人の吸血鬼として、彼に会いに行きました。

彼は私を暖かく迎え入れてくれました。街の中心に堂々と住み、人間として生きる彼の姿を見るうちに、私は彼の生き方に憧れるようになりました。何度もトーマスの目を盗んでは街に下り、彼を訪ねました。勿論、彼の人間としての生活の妨げにならないよう、多くの場合は夜、それもごく短い時間でしたが。階級の違う吸血鬼同士が交わることは決してないため、私達は仲間として、楽しい日々を過ごしていました。

でも、あるとき。私がいつものように彼の家を訪ねると、彼はそこにいませんでした。

先程も書きましたが、私は彼の人間としての生活の妨げにならないよう、プライベートなことには干渉しないようにしていました。たまたま留守にしていたことはそれまでも何度かありましたし、私も感知能力を意識的に抑え、彼の行方を探るようなことはしませんでした。でも、その日は何故か、嫌な予感がして……。

これは街の人々と接している内に気づいたことなのですが、我々吸血鬼のように闇に住まう者は、人間に比べると、理屈や知識・経験よりも、自らの感覚を重んじる傾向にあるようです。私も例外ではなく、どうしても気になって感知能力を用い、彼の行方を追いま

した。そして、見たのです。若い人間の女性を襲う、彼の姿を。

もう既にトーマスから説明を受けたかも知れませんが、吸血行為は《第一級吸血鬼》にとつては相手を虜にするための行為であり、その能力のない《第二級吸血鬼》にとつては嗜好行為に過ぎず、《第三級吸血鬼》に至つては衝動的な発作のようなものでしかありません。勿論、仲間を増やす、という目的を持って行われることもあります。……人間と同様に異性間の交わりによつて子孫を残すこともできる以上、生きる上でどうしても必要な行為ではないのです。

だから私は、彼を止めました。そうして、女性が逃げてしまうと彼は私を振り払い、何処かに行つてしまいました。私は彼を止めることができたことに安堵し、それ以上のことには考えが及びませんでした。ただ次の日にでも、じっくり話し合えばいいと……そんな風に思つていただけで。でも、そのとき……今から思えば、彼はもう、彼ではなくなっていました。

その後、彼は自分の家には戻つてきませんでした。魔気も途絶え、私の感知能力をもつてしても、行方を知ることとはできなくなりました。もしかしたらウインストリアを出ていつてしまったのかと、私が諦めかけていた頃……彼の手による最初の殺人が起りました。

闇の者がその能力を発揮するとき、通常とは比較にならない量の魔気が放出されます。突然街の中に出現した魔気を感じた私は、それが彼のものであることを確信し、急いで街に向かいました。しかし、私が現場に到着した頃には、彼の姿はなく……喉を喰い破られて殺害された女性の死体だけが、その場に放置されていました。死体の様子から、彼が吸血行為に及んだわけではないことは、すぐにわかりました。しかしどんな理由があるにせよ、彼を止めなければならぬと……トーマスにも力を借り、私は彼を追うようになりました。

その後のことは、貴女もご存じの通りです。

私の力が及ばないばかりに、四人もの女性が犠牲になりました。教団については、彼を追ううちに不審な人影を多く目撃してはいた

のですが、彼の人間としての生活を壊さないためにも可能な限り内密に彼を止めなければならぬと……あくまで感知能力だけに頼り、情報を集めるなどの街の人々との接触を極力避けていたため、結局貴女に教えていただくまで事件の真相に気づくことができませんでした。彼の意識がどの時点から教団の支配下にあったのか、今となつては知る由もありませんが……少なくとも、この一連の事件に関する彼の行動は彼の本心ではなかったと、私は信じています。

そしてもう一つ……今になって思うことがあります。

私は何故、初対面の貴女に、あんな話をしてしまったのでしょうか？　話せば事件に巻き込む可能性があることくらい、充分に承知していたはずなのに。

貴女が強い《力》を秘めた銃を持っていたから……勿論、それもあつたのでしょう。

彼を捕らえることができず、事件解決の手がかりをつかむこともできずに疲れていた私には、正常な判断力が欠けていたから……これもあつたと思います。

でも本当は、助けて欲しかったから。あの露地裏で初めてお会いしたときみたいに、暗い袋小路に迷い込んでしまった私を、貴女が助けてくれるような気がしたから。無意識に助けを求める気持ち……それが私に、事件のことを喋らせたのでしょうか。

そして私の望んだ通り、貴女は私を助けてくれました。一族の恩人たる貴女を自らの手で奴隷にしてしまうという、償いがたい罪と引き換えに……。

……これ以上、貴女に伝えるべき事柄を、私は多く持ちません。ただ貴女にすべてをお教えすることが、私に許される数少ない償いの方法の一つだと、そう信じて……あと一つだけ、ここに記すことがあります。

この手紙を入れておいたリュックと共にトーマスに預けた硝子壺の中には、私の血が入っています。これを飲むことによって、貴女

の体内を流れる服従の血は消滅します。そして貴女は、《第二級吸血鬼》として覚醒します。

物心ついた頃から《第一級吸血鬼》として生きてきた私には、人間として生きることと《第二級吸血鬼》として生きること、どちらが貴女にとって幸せなことなのか、知る術がありません。ですからその判断を、貴女に託します。

人間であることを選んだからといって、私に近づきさえしなければ、服従の血が貴女に危害を加えることはありません。この先も探偵業を続けられるのなら、いつかまた今回のような事件に巻き込まれた際には、むしろ魔気への感知能力と耐性が貴女を守ってくれるでしょう。《第二級吸血鬼》の能力など必要ないと思われれば、その血は捨ててください。そして私のことも忘れて、平和な暮らしに戻ってください。

最後になりましたが、この度は私達の問題の解決に力を貸して下さい、本当にありがとうございます。吸血鬼の頂点に立つ者の代表として、心から御礼申し上げます。

さようならローザさん……どうか、お元気で。

橘〓優乃〓ジエクスクト

一つ大きな溜め息を洩らし、ローザは顔を上げると、いつの間にか側に控えているトーマスの存在に気がついた。彼女が手紙を読み終える刻限を過たず推し量り、彼女の思考の妨げにならぬよう、闇に紛れて待つていてくれたのだ。

「……優乃お嬢様は、ずっと孤独でした」

ローザの心を見透かしたかのように、トーマスは語り始めた。

「私は、優乃お嬢様の祖父の代から仕えている、言わばジエクスクト家の従者です。優乃お嬢様がお生まれになったのは、今から百年以上も前のこと……そのとき屋敷には、三人の住人がおりました。

優乃お嬢様の兄上であられるゼティ様と、母上であられる春奈様、そして私です。春奈様は優乃お嬢様をお生みになった後、間もなくお亡くなりになりました。私とゼティ様は力を合わせ、優乃お嬢様を育てて参りましたが……十数年後、ゼティ様は優乃お嬢様を私に託し、この地で永き《眠り》にお就きになりました」

「《眠り》……？」

「冬眠のようなものと思っていただければよろしいでしょう。吸血鬼は人間のように定期的な睡眠を必要としない代わりに、時折《眠り》に就かなければなりません。そしてその期間は、上位の者になればなるほど長くなります……話を元に戻しましょう」

ローザの問いを面倒がることもなく、話の腰を折られたことに憤ることもなく、トーマスは淡々とした口調で話を続けた。

「優乃お嬢様が初めて街に出られたのは、七十年余り前のことです。最初の内は、街の同じ年頃の子供たちと戯れる優乃お嬢様のお姿に、私も安心しておりました。太陽の光を苦手とする性質ゆえ、曇りの日や夕暮れどきに限られた交流でしたが……いつしか友人も増え、ときには私に無断で屋敷を抜け出すほどの、楽しい日々を過ごしておられました。」

しかし、その生活も長くは続きませんでした。人間と《第一級吸血鬼》に流れる時間の差が、優乃お嬢様と街の子供たちを引き離してしまったのです。一年が過ぎ、二年が過ぎ、三年が過ぎ……五年が過ぎてもほとんど成長しない優乃お嬢様の姿に、人々はいつしか我々を恐れ、忌み嫌うようになりました。中には、親や街の人々には内緒で友人であり続けてくれた方もいましたが……そんな方さえも、やがて訪れた戦乱の時代が奪ってゆきました。

……以来、優乃お嬢様は館に閉じこもりがちになり、街に下りられることは滅多になくなりました。更に時代が移り、我々が闇の者であることを知る者がほとんどいなくなっただけから、やはり必要以上に人と接しようとはなさいませんでした。成長に伴って《第一級吸血鬼》としての能力が覚醒し、自らに流れる時間を操作する術を

身につけてからも同様に……自分は他の人とは違うから、友達を作っても悲しい思いをするだけだから……自分自身にそう言い聞かせることで、優乃は孤独に折り合いをつけてきたんだ……」

突然口調を変えたかと思うと、トーマスは苦しげに黙り込んだ。消えかけた蝋燭の火をじつと見つめ、儂い光に顔を彩られながら、しばらく声もない。

「……優乃は今、吸血鬼と人間とのはざまで揺れている」

低く、小さく、だが力強い声で、トーマスは言った。

「この部屋は三階の西側にある。優乃の部屋は四階、東側の一番奥だ」

「どうして……それをあたしに……？」

「ローザさんの問いに、可能な限り答えるように」

突然、トーマスは命令口調で言い、フツと微笑んだ。

「優乃は僕にそう言った」

沈黙が落ちた。

ローザは、しばらく黙っていたが、

「……そう……」

目の前の男の主と比べても決して見劣りするものではない美しい顔に、長く忘れていた微笑みを浮かべ、静かにベッドから降りた。手紙と硝子壺はリュックに入れて片手に持ち、部屋に一つしかない扉に向かう。扉を開け、廊下に出ようとしたところで足を止め、精一杯の感謝を込めて。ローザは、ささやくように言った。

「ありがとう、トーマスさん」

返答はなかった。

不思議に思っただけ振り返ると、最早そこには、何者の姿もない。

暗い、昏い部屋の中。

吹き込む風にカーテンが揺れる、開け放たれた窓の際。

博物館にでも展示されていそうな古めかしい家具の数々に囲まれて、優乃は一人、輝きを失ってゆく星々を眺めていた。

街ではそろそろ最初の船が入港する頃だろうか。人々の目覚めと共に闇に住まう者たちの時間は終わりを告げ、陽の光あふれる世界が胎動を開始する。

夜が明ければ、ローザを街に送り届けるようトーマスに言いつけである。彼女が吸血鬼を倒すところは多くの人々が目撃しているし、ワイアードを含む数人の者には記憶封鎖を施しておいたから、事件解決の手柄はすべてローザのものとなるだろう。これをきっかけに腕利きの探偵として、街で活躍するに違いない。でも、自分は。

……もう二度と、こんな思いはしなくなかったのに……。  
後悔と絶望に微笑みさえ浮かべ、優乃は、ふと耳をすました。扉の向こう、廊下を歩く何者かが、靴音高く近づいてくる。

「トーマス？」

振り返り、扉を開いた者の姿に、優乃は息を飲んだ。

「ローザ……さん、どうして……」

その問いには答えず、ローザは後ろ手に扉を閉めた。立ち尽くす優乃の目前にまで歩み寄り、高々と手を振り上げる。

バシッ！

鋭い音が響き、近くにあった飾り棚を巻き込んで、優乃は倒れた。硝子板や飾り皿が割れ、鋭く尖った幾多の破片がバラバラと飛び散る。

「……何だ、やっぱ逆らえるんじゃない」

両手をパンパンと打ち鳴らしながら、ローザは意外そうに言う。破片で傷つくのも構わず床に片膝をつき、茫然自失している優乃の襟首をつかんで引き寄せた。そのまま有無を言わず、強引に唇を重ねる。

「ん……っ!？」

声にならない呻きを洩らし、優乃は驚愕に目を見開いた。信じられないくらい間近にある、斐翠の宝玉にも似た翠の瞳に、他ならぬ



自分の顔が映って揺れている。優乃は両手でローザの胸を押し、弱々しく抵抗を試みたが、やがて互いの衣服越しにローザの温もりを感じると、抵抗する力をなくしてローザに身を委ねた。

いつしか二人は、しっかりと互いを抱き締めていた。長い時間をかけて濃密な口づけを交わし、静かに唇を離す。恍惚とした表情で吐息を洩らす優乃を見下ろし、

「こないだのお返し……さっきの平手打ちと合わせて、これで全部チャラにしてあげるわ」

ローザはニツと微笑んで見せた。

「……私のことを、恐れないのですか？ 私のことを、殺さないのですか？」

美しい栗色の瞳を戸惑いに揺らしながら、おずおずと尋ねる。ローザは、ああ、と呟くと、すまなさそうに言った。

「ゴメンね……貴女の仲間を。でも、ああするしか方法がなくて……」

「そんな、謝らないで下さい！」

優乃は思わず叫び、驚くローザの胸に顔を埋めた。

「彼のことは感謝しています、彼の魂は救われました！ みんな、みんなローザさんのおかげです！ でも私は……私も、吸血鬼です……人間の血も混ざっているとは言え、あのような力を操ることもできます。ローザさんとは、違うんです……」

それ以上は言葉にならず、優乃はぐつと押し黙った。喉がキュツと痛み、今にも涙があふれそうになる。だがローザは、そんな優乃の肩をそつとつかんで引き離すと、

「ふーん、人間の血も入ってるんだ」

じいっと顔を覗き込み、優しい声で尋ねた。

「……で？ あたしは何で攻撃できたの？ 確かユーノの奴隷になつたんじゃないっけ？」

「それは……奴隷と言っても、魔力の介在なくしては命令ができないからで……今のように不意をつかれた形では、魔力を用いて命令

する暇も……」

「つまりそれって、ユーノが意識的に魔力を使って命令しない限り、あたしの自由は制限されないってことよね？」

「え、ええ……そういうことになります」

「なーんだ！　だったら何の問題もないじゃない！」

「……えっ？」

呆気に取りられる優乃の肩をつかんで立ち上がらせ、ローザは晴れ晴れとした笑顔を浮かべた。

「あーよかった！　いくら友達でも、ケンカもできない、好きなことも言えないってんじゃたまんないからね！」

「……友達……」

優乃は茫然と呟いた。

何年ぶりに、その言葉を口にしただろう。何十年ぶりに、そう呼べる人に出会えただろう。心の中で自分を縛っていた、重く冷たい孤独という名の鎖が、音をたててちぎれ、崩れていく。

そして次にかけられる言葉が、心の奥底でチリチリと燃える疑惑という名の昏き炎を跡型もなく消し飛ばしてくれることなど、優乃に想像できるはずもなかった。

「ねえ、あたしと一緒に仕事しない？」

更に呆気に取りられる優乃を見つめ、ローザは続けた。

「ユーノの能力とあたしの能力、二つ合わせれば無敵だと思わない？　まあ、イヤならいいんだけどさ」

「……ローザさん……」

「ん？」

「……っ！」

壊れそうな笑顔にボロボロと涙をこぼし、優乃は、勢いよくローザの胸に飛び込んだ。

「はい……はい……！　お手伝いします、私で良ければ、いくらでも……！」

危つく後ろ向けに倒れかけたところをギリギリの線で踏み留まり、優乃の栗色の髪を優しく手櫛で梳きながら、ローザはふと、遠い故郷に想いを馳せた。

家族のことを考える。

故郷の家にいた頃の、自分のことを考える。

あの頃の自分は、商売に夢中でほとんど家にいることもないくせに、古臭い行事や交流会には必ず自分を連れていく親が、嫌いで嫌いで仕方がなかった。少しでも早く家を出たくて、一人で生きていけるようになりたくて、料理や洗濯、掃除から裁縫に至るまで、決して他人任せにはしなかった。自分の身は自分で守れるように、武術や射撃の稽古にも励んだ。

でも、今となってはもう遅いけど、形ばかりでも親がいて、財力があって、自分を高めるために費やす時間もあつたっていうことは、それはそれで結構幸せなことだったのかも知れない……。

「ローザ様、馬車の用意が整いました」

背後からかけられた声に、ローザの意識は現実に戻された。胸の中で今も啜り泣いている、幼く無邪気ですつと年上の友人の背を、空いているほうの手で優しく叩く。

「ユーノ、ほら顔を上げて……お迎えがきちやっただからさ」

だが、優乃は動かない。幼子が駄々をこねるように、ローザの服をしっかりとつかんで放そうとしない。ローザは溜め息混じりに苦笑し、

「トーマスさん、悪いんだけど、もう少し待ってくれな……」

振り返った顔をこわばらせた。

爛れ崩れた肌。

淡灰色に濁った瞳。

眼窩からはみ出た目玉。

服装、体格、声に至るまで、あの見目麗しい青年と寸分たがわぬものを持ちながら、腐乱死体が服を着たような不気味な容姿の男が、扉口に立って慇懃な礼の型をとっている。野ざらしの岩めいた浅黒

い肌や、短く切り揃えられた白髪は、むしろ彼にこそ相応しい。

「……………？ ローザ様？」

反応がないことを不審に思ったのか、男がゆっくりと近づいてくる。どう見ても死んでいるとしか思えない男に間近に寄られ、腐った手を目の前でぶんぶんと振られて、

「…………ふうつ」

流星のローザもあえなく失神した。

長い夜が、明けようとしていた。

何処かで何かが目を覚まし、枝葉をザツと鳴らして去る。ほのかに香る蜜の匂いに、虫たちがせわしなく飛び回る。

ベッドの横で椅子に腰かけ、気を失っているローザの膝の手当てをしながら、優乃はふと目を細めた。

「…………ねえ、トーマス」

不意に呼びかけられて、窓際にたたずんでいたトーマスが、驚いたように顔を向ける。

「何でしょう？」

「実はね、私…………もうずっと前から、やってみたかったことがあるの」

楽しそうに、夢見るように喋る主の横顔に、トーマスは眩しそうに目を細めた。

「私は吸血鬼だから、他の人とは違うからって、ずっと諦めていたけど…………ローザさんと一緒だったら、何だか、簡単にできそうな気がするの。…………うまくいくかしら？」

「…………そうだね」

トーマスは微笑み、窓の外の景色に目をやった。

「きつと…………何だつてうまくいくさ。それに、これからもっと増えるよ。彼女のように、優乃に勇気を与えてくれる友達が。何人も何人も、両手に余るくらい…………そして、みんなで幸せになれる」

「うん…………そうなったら、今度はトーマスが友達を作る番だね」

優乃はクスクスと微笑んだ。

「でも、きつと大変よ。ローザさんでさえ気絶しちゃったんだもの。その顔で人前に出ちゃダメだって言ったのに」

「ひどいこと言うなあ。仕方ないんだ、知ってるだろ？ 結構疲れるんだよ、生きてた頃の顔でいるのは」

爛れ崩れた不気味な顔に、さも憤慨したような表情を浮かべて見せる。だが優乃が、心から楽しそうに微笑んでいるのを見ると、トーマスは、フツと表情を和ませた。

似ている…… 本当にそっくりだよ、春奈。あの頃の君に。

遙かな過去、彼がまだ闇の住人でなかった時代。短い生涯の中で愛した永遠の想い人の姿を胸に、トーマスは心から優乃を祝福した。

「……おめでとう、優乃。君は自由だ」

《風と水の都》ウインストリアに、また新たな一日が訪れた。

何処かで何かが目を覚まし、枝葉をザツと鳴らして去る。ほのかに香る蜜の匂いに、虫たちがせわしなく飛び回る。

長い夜が、明けようとしていた。

数日後。

銀行を兼ねた役所の館内で、静かな戦いを繰り広げる男女の姿があった。

「しつ、こい、です、ねえええつ」

「そ、れは、どう、もおおおつ」

受付の窓を閉めようとしているのは、以前ローザと優乃の応対をした、縦幅の狭い眼鏡をかけた男だ。そして受付の窓をこじ開けようとしているのは、他でもない、ローザその人だった。役所を訪れていた他の住民や、カウンターの奥で事務の手を止めている職員たちの呆れたような視線を浴びながら、一進一退の攻防を展開している。

「仕事、の、こと、なんだけど、さあああつ」

「ダメな、ものは、ダメ、なんですうううつ」

ローザの怒涛の攻撃を、受付係が精一杯の力で押し返す。

「何、と、言われ、ようとおおおつ、必要な、書類を、提出して、いただかなくては、です、ねえええつ」

「書類、なら、持ってきてる、わよおおおつ」

「……へっ？」

受付係が呆気にとられた隙に、ローザは素早く窓と窓枠の隙間に手を入れた。そのまま一気に攻め落とし、つかい棒代わりに肘を置く。

「えーつとお？ 国の許可証か、古くから街に住んでる人の紹介状がいるんだっけえ？」

わざとらしく言いながら、ローザは懐から一枚の書状を取り出した。しぶしぶ書状に目を通した受付係の半信半疑のまなざしが、みるみる内に驚愕のそれへと変わる。ローザが出した書状はウィンストリア警察署長直々に彼女に宛られた感謝状であり、また探偵とし

て開業させることを役所に強く推薦するものでもあった。

あの夜、意識をなくしたローザを優乃が運び去って間もなく、異常を察した周囲の住民の通報により、教団《光と闇の礎》の教会は警察の立入捜査を受けていた。教会内にいた者が一人残らず眠っているという異常事態に捜査は難行を極め、また吸血鬼による連続殺人事件を裏で操っていたことについては決定的な証拠が何一つ見つからなかった。そこで教団が罪に問われることはなかったが、建物内を隅々まで捜査した結果、教団が大量に所持していた武器の数々や不当に信者から押収していた金品などが相次いで発見され、教団の権威は絶望的なまでに失墜。ウィンストリアにおける布教活動は事実上崩壊した。

やがて目覚めた人々の証言からローザが吸血鬼を倒したことが明らかになり、警察は今後も起こりうる同じような犯罪への牽制を兼ねて、ローザを大々的に表彰した。ローザは賞金のラウアル金貨百枚と感謝状を受け取ったその席で、今後もウィンストリアの治安維持に貢献することを誓い、その活動を全面的に支援するという内容の文面を、感謝状の末尾に書き加えさせることに成功したのだ。

余談だが、教団《光と闇の礎》ウィンストリア支部の最高責任者であったワイアード大神官は、吸血鬼はまだ生きている、死んでないといないと喚き続けたため、精神に異常をきたしていると見られて病院送りになったらしい。優乃の話によると、流石に大神官を務めていただけのこととはあり並の精神力の持ち主ではなく、記憶封鎖のかかりが不完全だったのだろうということだ。

「えーっとお？ それから確か、保証人がいるって言ってたわよねえ？」

ローザの勝ち誇った声に、茫然と書状を見つめていた受付係が我に返って顔を上げる。

「紹介するわ。彼女があたしの保証人……橘〓優乃〓ジエクスクトさんよ」

「どうも、こんにちは」

ペコリと御辞儀する優乃を見て、受付係があんぐりと口を開ける。震える指で優乃を指差し、口をパクパクと動かしている。先程の反応から彼が今回の事件に関してほとんど何も知らないことを看破したローザは、意地の悪い笑みを満面にたたえつつ、懐をこそごとと探りながら彼の顔を覗き込んだ。

「ところでさあ、事務所を建てる場所なんだけど……確かこないだ言ってたわよね？ 商業区域の一等地に空きがでてるって」

「え？ あ……ええ、確かに」

傍目にも動揺していることは明らかだが、受付係は平静を装い、眼鏡を外してレンズを拭いた。改めて眼鏡をかけ直し、幾分ましになった顔色で、何処からか引つ張り出してきた帳簿をめくる。あるところで手を止め、帳簿を逆さまにしてローザにも見えるようにカウターの上に置き、彼は指をさしながら説明した。

「この物件です。この通り、立地条件としては申し分ありませんが

……」

「へえ、いいじゃない。オッケー、買い取らせてもらっわ」

「は……はいっ！？」

受付係はすつとんきような声を上げた。

「買い取るって、この物件をですか！？ 賃貸じゃなくて！？ 貴女、ここが一体いくらすると……！」

「あら、言ってなかったっけ？」

ローザはニヤニヤ笑いを崩さずに、懐から身分証明書を取り出し、受付係の眼前に突きつけた。やけに仰々しい赤革の身分証明書には、いかにも高価そうなドレスを身にまとった美しい女性の……いや、紛れもなく、ローザ本人の写真が張りつけてある。

「あたしは旅の超一流の探偵、ローザ。本名はローゼンシル＝レクター……世界を股にかける貿易商、レクター伯爵の長女よ」

頭の中が真っ白になっている受付係に追い打ちをかけるように、ローザは優乃に目配せして彼女が持っていた皮袋を受け取り、カウターの上に置いた。紐解かれた皮袋から真新しい金貨を無造作に



つかみ取り、受付係の目の前にばらばらと積み上げてゆく。

「今ここに、合計百枚あるわ。頭金としては充分でしょ？」

金貨の山に手を乗せて、ニィツと笑う。

しばしの後、

「……ふうっ」

受付係は卒倒した。

見物を決め込んでいた他の職員たちが慌てて駆け寄り、受付係を役所の奥へと運んでいく様を見ながら、

「どうして倒れたんですか？ あの人」

優乃が不思議そうに呟く。

「世の中色々あるってことよ」

ローザは悟ったようなことを言い、優乃の腰に手を回した。

「せっかくユーノが新しく始める商売の相談に来たのにね」

数週間の後、予定通り商業区域の一等地に、吸血鬼退治の英雄ロゼンシル・レクター嬢を所長とした探偵事務所が開業した。元々は住宅であったところを改装された建物は、所長の趣味なのか少々派手である上に、共同経営者の趣味もきっちりとり入れてあるらしい。各部には色とりどりの花が飾られており、見た目にはとても探偵事務所には見えないが、結構繁盛しているようだ。ただ一つ、オカルト関係の依頼が絶えないことが、所長の悩みの種だとか。

それから少し遅れて、街外れの《風渡る丘》に園芸専門店が開店した。いかにも可愛らしくこざっぱりとした店舗は店主の所有する館の一部を改築したもので、品揃えの豊富さと技術力の高さ、そして何よりも店主の可愛らしさと店員の格好良さが評判を呼び、最近では園芸通のみならず、若い男女の間でも人気が出てきているという。もっとも、最初から買物以外の目的で店を訪れた者のほとんどは、もう一方の同性の人品に打ちのめされて、二度と足を運ばなくなるそうだが。

## エピローグ

ある晴れた日の午後のこと。

優乃はその日も長袖のドレスに麦藁帽子、日傘にサングラスのお決まりのスタイルで、広大な敷地内に新たに設けられた花畑にいた。いつもはふんわりと肩にかかっている髪は、作業の邪魔にならないうよう、帽子の中に納められている。最近すっかり涼しくなった風が、汗ばんだうなじを優しく撫でてゆく。花々の合間を縫って軽やかに駆け回り、小さなじょうろで水を撒く彼女の表情には、もう以前のような影はない。

美しい少女の愛を一身に受けて、こちらでも美しく咲き誇っているのは、色鮮やかな秋の花の数々だ。花びらや葉にたまった露が、陽の光を反射して燦然と輝いている。優乃はひとしきり水を撒き終えると、じょうろを所定の位置に戻し、小走りに駆けて花畑を出た。地面に置いてあった箒をひよいと持ち上げ、時折立ち止まって沿道の花を見つめ、気に入ったものを丁寧に摘み取り、箒の中に入れてゆく。

いつしか花でいっぱいになった箒を片手に店に戻ると、先日設置したばかりの電話が鳴っていた。商売をするのなら必需品だと言って、ローザが手配してくれたのだ。

だが、自分で電話を受けたことは、まだ一度もない。優乃は箒と日傘を入口近くの棚の上に置くと、一旦奥に入って代わりに出てもらおうとトーマスを搜したが、姿が見えないので覚悟を決めて電話の前に立った。

ここしばらくの間に、優乃の世界は自分でも驚くほどに広がっていた。ローザや役所の人たち、それに買物に来てくれたお客さん。同じ《風渡る丘》に住む人々に、開店してからは毎日のように遊びにきてくれる近所の元気な子供たち。今まで内側に引きこもっていた目を外に向ければ、そこには予想を遥かに超えた広大な世界が広

がっていたのだ。

ローザさんかしら？ また仕事の協力を頼むのかな？

それともお店のお客さんかしら？ 最近は遠くに住む人たちのために、馬車で麓まで迎えに行くサービスを始めたって、トーマスが言ってたけど……。

ちゃんと喋れるかな？ 確か、お店の名前を最初に言つのよね。

ローザさんと一緒に考えてつけた、私のお店の名前……。

優乃はフツと微笑むと、受話器を取り、一呼吸おいて元気良く言った。

「はい！ こちらフラワーショップ《月見草》です！」

- E N D -

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6030d/>

---

月見草の咲く街

2010年10月8日15時31分発行